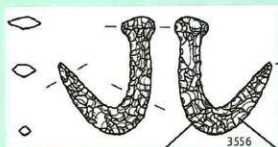


## 分析レポート4

### 石器はどう使われた？

石器は道具であり、多くはその用途をあらわす名前がつけられています。石やり、石匙、石オノ等です。しかし、当然ながら、昔の人々がどのように石器を使っていたか、みてきた人はいません。こうした名前は、その形から用途を想像してつけたものです。顕微鏡で石器の刃に残された磨耗・キズ(=使用痕)を観察し、それと石器の使用実験によって生じるキズを比較することにより、実際に石器がどう使われたか推定することができます。東畑遺跡から出土した次の3点の石器について顕微鏡で使用痕を調べてみました。



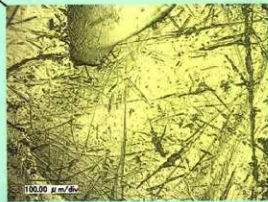
188 釣針形石器 (S=1:1)



190 石器の先端 (写真の幅=0.7mm;実物の100倍)



189 石器の表面 (写真の幅=2cm;実物の3.5倍)



191 石器の表面 (写真の幅=0.7mm;実物の100倍)

#### 1. 釣針形石器 (つりばりがたせつき)

黒曜石製で、釣り針の形をした大変珍しい石器です。実際に使われたのでしょうか？それとも装飾品だったのでしょうか？顕微鏡観察では、特に使われたと思われる痕跡はみつきませんでした。形もモロそうで、実用にはあまり向いていません。そのかわり、石器の全面が細かいキズで覆われていることがわかりました(186~188)。キズの方向はばらばらで、特定の方向に磨いた痕跡はありません。長い間、人手に触られることによって、自然についた痕跡のようにも思われます。特別な石器であったために、多くの人が触れたのでしょうか。

#### 2. 石槍 (いしやり)\*

東北地方産の良質の頁岩で、ていねいにつくられています。このような槍が縄文時代前期の関東・中部地方で、時々みつかるので、「村の有力者の力を示す宝物として特別に東北地方から輸入されたものでは？」と考える人もいます。この槍は、真ん中の方の剥離面が、写真(192)でみえるように、より時間がたって茶色に変色しています。つまり、現在の槍は古い槍を削り直してつくられたことがわかります。また、折れていますが、使用中に折れたのでしょうか(193)。しかし、折れ面の縁がやや摩滅しているので(194)、折れた後すぐには捨てられずに、人手に触られていたようです。こうしたことから、この槍は「宝物」とまではいかなくとも、遠くから運ばれた珍しい石でつくられていたため、つくり直して使われたり、破損後も長い間手許に置かれていたものようです。全体に表面がつやを帯び、縁がところどころ摩滅している



192 石槍 (長さ10cm)



195 定角式磨製石斧 (長さ6.6cm)

のも、長い間触られたためかもしれません。

### 3. 定角式磨製石斧 (ていかくしきませいせきふ)

石材は塩基性片岩<sup>塩基性片岩</sup>です。この石は新潟県の糸魚川周辺で取られた石のようです。どのような経緯で東畑遺跡にもちこまれたのか興味深いところです。

さて、この石斧はどのように使われたのでしょうか。石斧の刃部を観察しますとb面側の刃に刃こぼれや縦方向にキズが多数観察されます(196)。このキズの状況を大きく拡大して観察した写真が右下の写真です(197)。縦方向に黒い線を何本もみることができま。写真の下方は、丸く盛り上がっているように見えますが、先端部が摩耗していることを示しています。このような使用痕の特徴は、この石斧が木に対して使用された可能性が高いことを示します。さらに、b面側により強いキズや摩耗がみられますので、この面が対象物とよく接触していたことが考えられます。このようにb面側により強く使用痕がでる使い方はどんな使い方でしょうか。考えられるのは現代の手斧のような使い方です(198)。どのような人がこの石斧を使っていたのか興味がわいてきますね。

(詳細はDISC-1参照)

(株)アルカ 山田しょう・池谷勝典

193 折れ面の縁の摩耗  
(写真の幅=7mm;実物の10倍)

194 槍の折れ面 (写真の幅=4cm;実物の1.75倍)

196 石斧のb面側の刃の拡大  
(写真の幅=1.5cm;実物の4.7倍)197 石斧の刃の先端の摩耗  
(写真の幅=0.7mm;実物の100倍)

刃に直行する縦方向のキズから斧のように使ったことがわかる。



198 磨製石斧復元図

## 心といのり、そのかたち

## 人や動物をかたどる

縄文時代を生きた人々の心に直接触れることはできません。しかし彼らは当時の精神活動に関わりがある道具を残しています。赤く彩ったり、人体文をつけたり、イノシシの顔をつけたり、器面いっばいに大胆な模様をレイアウトしたりした土器にも、通常の使用目的を超える、心やいのりに関わる要素がたくさん含まれているのでしょう。

土器と同じように粘土でつくられた素焼きの小像である土偶は、生業活動とは離れた、非常に精神活動に関わりのある道具と考えられています。

東畑遺跡では縄文時代中期に属する11体分の土偶がみつかりました。胸部が残る個体にはみな乳房の表現があります(1597,1602,1603,1605)。一般的にいわれるように、東畑遺跡の土偶も女性像を表現しています。

大きな頭部の破片である1596には耳飾りのような表現があり、頭部はまるで結い髪のように4本の粘土紐が束ねられています。頬にも入墨かお化粧のような線が描かれています。当時のファッションを反映しているのでしょうか。

また1596や上半身がみつかった1597は、中信地方の中期後葉の遺跡に似かよった種類が多くみられます。そしてその分布範囲と唐草文土器とよばれる土器の分布範囲はほとんど重なります。このことから精神活動も他の文化や道具と同様に、一定の地域で共通していたことを推測できます。



201 土偶の集合

東畑遺跡では全部で11体の土偶がみつかった。しかしどれも壊れている。何かの目的で壊す行為のために土偶は生み出されたのかも知れない。右上(1602)は長さ6.0cm。



199 動物の顔がついた土器

前期の土器につくイノシシの顔(351)、次第に退化していく表現(888,1426,1415,1563)。後期の土器につく顔は蛇か(1598)。右上(1426)は縦8.5cm。



1596

200 土偶の頭部

丸顔におちよぼ口。耳飾りをつけ、頬の線は入墨か、お化粧か。後ろは4本の粘土紐を真ん中で束ねている。湯釜き文が特徴的な中期後葉の土偶である。長さ9.6cm。

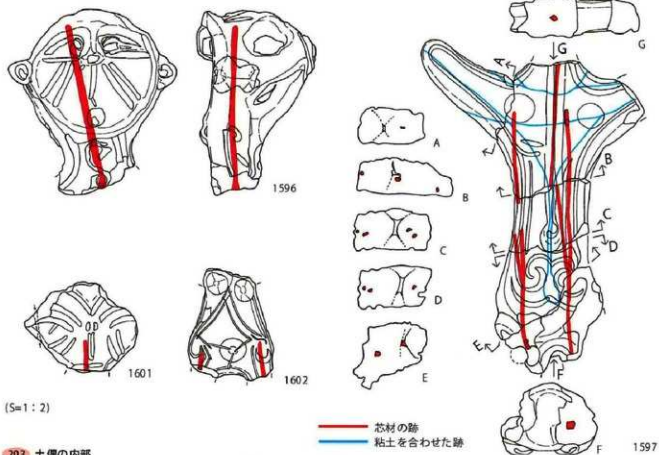


1597

202 赤く塗られた土偶

中期後葉のパンパイをした土偶の体部。胸ははがれてしまっているが女性を表現している。右下のお尻のあたりに赤く塗った跡が観察できる。長さ17.4cm。

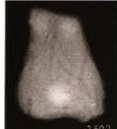
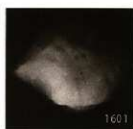
土偶のつくり方



(5=1:2)

203 土偶の内部

割れ面とX線写真の観察で、土偶の内部には芯材が入っていたことがわかった。大きくて不安定な形であるが、立つ土偶に焼き上げるために木の棒を支えにしたのだろう。芯材は燃えて空洞になっている。また1597の土偶は何かの粘土紐を合わせて1体の土偶をつくり上げている。



204 土偶のX線写真

顔や体の模様以外に、芯材や粘土紐の隙間が浮かび上がる。(撮影：長野県立歴史館)

## 石でつくられた祈りの道具

石棒<sup>205</sup>も丸石も、土偶と同じように当時の人々がお祭りに使ったり、祈りを捧げたりする道具であると考えられています。今回の調査では石棒が中期の穴から出土した例と、丸石が後期の敷石住居から、他の土器や石器と一緒に投げ込まれていた例がみつかりました。

他の遺跡では石棒が住居の炉に立ったままで見つかったり、丸石が住居の床に置かれていたりする出土例があります。いったいどんな祈りを捧げていたのでしょうか。東畑の出土例は、役目を果たした道具を廃棄した状態なのかもしれません。



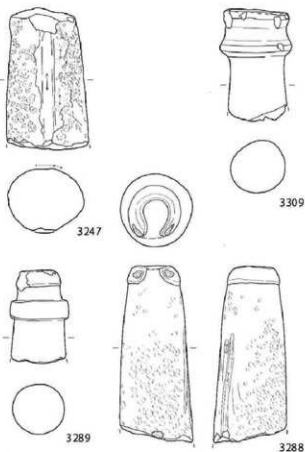
## 205 出土した石棒

完全な形のものはない。いずれも砂岩を加工している。左上の長さ30.1cm。



## 207 丸石

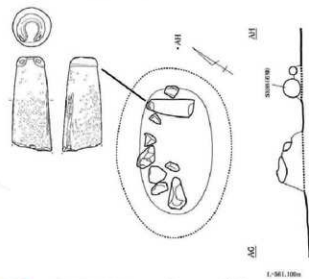
丸みを帯びた大形の川原石を拾ってきている。後期前葉の敷石住居跡を埋め尽くす石の中にこの丸い石が出土している。祈りの象徴だろうか。使用した痕がみられない。右下の長さ31.0cm。



## 206 石棒の実測図 (1:8)

3309と3289は横方向に帯状の突出部がある。3288は頭部に細かな彫刻を施している。北陸地方に多いタイプである。3247は胴部に細かな縦き跡がある。未製品かもしれない。

## SK018 土坑跡実測図 (1:30)



## 208 SK018石棒出土状況

楕円形と考えられる長さ133cmの穴に横たわって出土した。

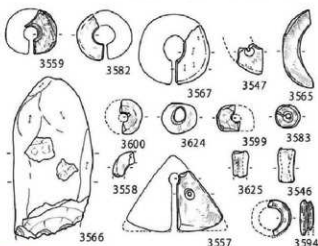
## 縄文時代のアクセサリ

人々はどんな服を着ていたのでしょうか。土器を彩る縄目や底部に残る網代痕から、繊維加工や織物の高い技術があったことがわかります。きっと土偶や土器の模様のようなデザイン性の高い服を着こなしていたことでしょう。また今回の調査では当時のきれいなアクセサリがみつかりました。

前期の人々は球状耳飾を耳につけて、小さな玉をいくつもつなげたネックレスで首元を飾っていたようです。素材には加工しやすく、磨くときれいな滑石や透閃石岩を選んでいます。

中期になると、大きな「大珠」と呼ばれる首飾りを胸に垂らすようになります。また耳には土製の耳飾りをつけていました。東畑の土偶にも耳飾りをつけているものがあります。(54頁)

大珠は、糸魚川市周辺のムラで加工されたヒスイ(硬玉)製品で、各地の大きなムラへ運ばれていきました。東畑の未製品はロディン岩という石でしたが、その産地は糸魚川周辺にあります。数の少なさと、ヒスイの貴重さから、大珠は単なる装飾品ではなく、権威の象徴としての用途が考えられています。



211 アクセサリの実測図 (S=1:2)

石材を打ち欠き、粗削りの後、砥石で整形していく。細かな線は磨いたり削った跡である。



212 砥石

アクセサリや骨製品などを砥いだ道具。質の良い砂岩を使っている。右の長さ41.0cm。



209 アクセサリ一類

大小さまざまなアクセサリ。3566は大きな首飾りの未製品(ロディン岩)。669は土でつくった大きな耳飾りである。



210 生坂村東部八幡原道跡のアクセサリ

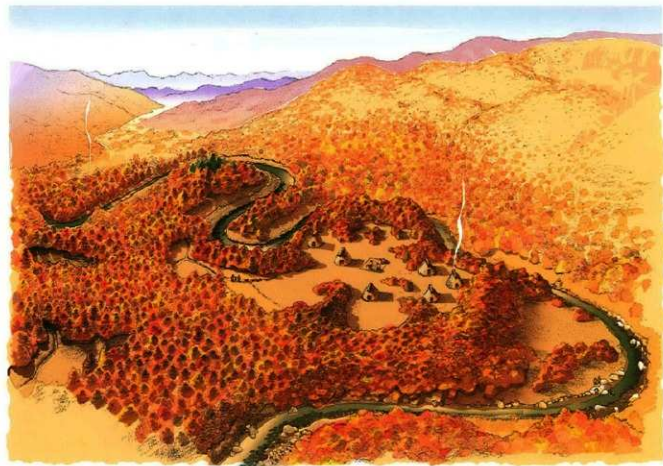
左は球状耳飾。裏に補修の穴がある。右は管玉。首飾りだろう。ていねいに磨かれている。左直径5.0cm。



213 球状耳飾の装着例

両耳の耳たぶに穴を開けて、「C」字状の耳飾りを通してぶら下げる。現代のピアスと似る。

## 東畑ムラの秋の風景



214 東畑ムラの秋の風景

実りの秋、夕暮れになると男たちが狩りからムラへ帰ってくる。女たちは天日干しにした木の实をかたづけている。子供たちはまだ川で魚とりに興じている。北の彼方にみえる高い山はまだ白くならない……。

(この図はP72縄文時代中期中葉IV期の住居配置から想定しました。)

### 第3章

## 周辺地域との交流



東畑遺跡からは、もともと筑北地域には産出し  
ないものが発見されています。さまざまな石器の  
材料になる黒曜石、磨製石斧に使われる透閃石岩  
（軟玉）には特定の産地があり、その場所は東畑  
遺跡からみればどちらも逸隔地といえます。また  
土器や住居の炉の形も、別の地域に多いタイプが  
みつかっています。これらのものは、ここで暮ら  
した人々と周辺地域のムラや人々との交流や交渉  
があったことを物語る資料と考えられます。





# 土器や石器が来た道

## 峠と川

東畑ムラのあった縄文時代前期から後期。日本各地にも大きなムラがありました。調査では地域特有の道具と別の地域から運ばれた道具やその材料がみつかります。このことはムラ単位で自給自足している生活ではなく、周辺地域と密接な交流をしていた当時の人々の姿をあらわしています。

東畑ムラでも周辺各地から運んできた道具や材料がみつかりました。そんな材料の代表例は黒曜石です。黒曜石はマグマが冷えて固まったガラス質の火山岩です。長野県では八ヶ岳や霧ヶ峰一帯に産地があります。

調査では黒曜石製石器の材料（原石や石核）と石器をつくるときにできる細かなかけらがたくさんみつかりました（49㉮・図175）。きっと八ヶ岳周辺にあるムラから運んだ黒曜石を使って石器をつくっていたのでしょう。

別のムラでつくられた石器自体が運ばれてくる例もあります。緑色のきれいな磨製石斧やアクセサリは日本海沿岸の姫川流域周辺の石器づくりのムラから製品として東畑にもたらされたようです（62㉮）。

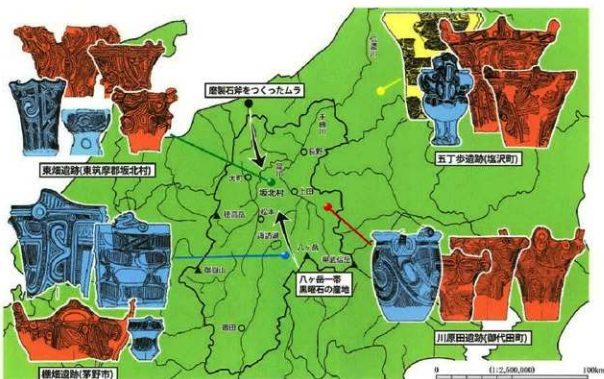
このような石器の流通と同じように土器も周辺地域との交流がありました。しかし現在の研究では土

器をつくった場所（ムラ）を特定することが難しいため、種類や数を周辺の遺跡と比べて、地元の土器であるとか、別地域の土器であるとかという判断をしています。また最近、素材の粘土などを科学的に分析する方法も研究されてきています（46・47㉮）。

縄文時代前期、橙色でザラザラしたような地元の土器（42㉮・図147など）に混じって、数は多くないですが、薄くて白っぽく、きめのそろった土器片がみつかります。模様も特徴的で一目で区別できます（216）。この土器は北白川下層式土器とよばれる、おもに近畿地方から東海・北陸地方に分布する土器です。東畑にムラがつくられはじめた頃、すでに西日本との交流があったのでしょうか。

縄文時代中期になると、使われた土器も多様になってきます。かたちや模様だけではなく、焼き色や土の様子が違う土器がたくさんみられます。

SB45住居では、北陸地方の影響を強く受けた土器がたくさんみつかりました（26・27㉮）。また北陸地方の特徴と千曲川流域の特徴が融合したような土器もみつかっています（40㉮・図138）。同じ頃、SB110住居では千曲川流域の土器を炉に転用しています（図217）。



215 各地の縄文ムラと使われた土器

八ヶ岳のふもとにある棚畑ムラ、千曲川上流の川原田ムラ、信濃川流域の五丁歩ムラ、そして東畑ムラ。使われている土器にも地域色がある。そして別の地域の土器も混ざっている。



P551

## 216 西日本の土器（北白川下層式土器）

とても深いつくりで器面にある爪形文も特徴的。これは西日本の土器である。東畑にムラがつくられはじめた前期にはすでに交流があった証拠である。

少し時期が新しくなったSB95住居（28・29<sup>号</sup>）の土器を、同じ頃に千曲川上流や八ヶ岳のふもと、そして信濃川流域のムラの土器と比べてみました（215）。

これを見ると、当時のムラでは地元の土器ばかりではなく、周辺地域の（影響を受けた）土器も多く使われていることがわかります。東畑ムラでも周辺地域の土器が使われていたことが明らかです。

このような状況は中期の後半も続いています。SB04住居の埋裏は、千曲川流域の土器と犀川流域の土器が重なって埋められています（31<sup>号</sup>・図86）。

そして東畑ムラの終わりが近づく後期には、東北地方南部に多く分布する土器とそっくりな模様をつけた土器もみつかりました（図218・219）。

このような道具（もの）の動くルートは、これまでの研究から、大小の河川や海岸沿いに運ばれる場合と、峠を越えて運ばれる場合が考えられています。

東畑ムラで見ると、犀川から麻績川や低山の稜線をさかのぼるルートや、江戸時代の善光寺西街道と重なる松本平－立峠－筑北の谷（東畑）－埴山（猿



## 218 東北地方の土器（網取式土器）

縄文時代後期。宮城県南部から福島県に分布する土器とよく似ている。信濃川から千曲川をさかのぼってきたのかもしれない。



P567

## 217 千曲川上流の土器

縄文時代中期に千曲川上流、今の東信地方で広く使われた土器。峠を越えて東畑ムラへ伝わったのだろうか。

ヶ香場峠－善光寺平というルート、上田盆地－修那羅峠－筑北の谷（東畑）ルートなど、千曲川や犀川という大きな河川沿いを経て、峠を越えるルートをいくつか想定できます。

215の図を見ると、地域間を結ぶルートの交差点にあたるのが筑北地区、東畑ムラであるようにみえてきます。その状況はJ R篠ノ井線、国道403号、長野自動車道が通過し、産業・経済の要路となっている、現在の筑北地区の姿と共通しているのかもしれない。

## 東畑遺跡



P0182



P0285

## 郡道跡



## 219 東畑の土器（上2点）と福島県の土器（下2点）

郡道跡（福島県いわき市）の土器と比べてみる。口縁部や脚部の模様がよく似ている。当時の情報網の細かさ、広さを感じる。

## 分析レポート5

### きれいな石はどこから来たのか

きれいな緑色をした磨製石斧やアクセサリー類。これらの石器はどこからきたのでしょうか。

東畑では製品しかみつかりません。ということは、どこか別のムラでつくられた石器が運ばれてきたということなのでしょう。その答えを知るにはまず石材名を調べて、生産地を明らかにする必要があります。

そこで平成16年10月、長野県立歴史館（千曲市）へ「エネルギー分散型X線分光装置<sup>®</sup>」による定性化学分析をお願いしました。その結果はチャートとしてあらわされます。（図220～223）

この結果と石器の実物を糸魚川フォッサマグナムミュージアムの学芸員である宮島宏氏にみていただきました。するとアクセサリー類には滑石が多いこと、「大珠未製品」はヒスイではなくロディン岩であること、磨製石斧にも透閃石岩や透緑閃石岩が使われ、蛇紋岩<sup>®</sup>は1点だけであることがわかりました。

（DISC-1参照）

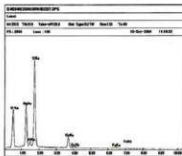
ヒスイ（ヒスイ輝石岩）を「硬玉」とよぶように、透閃石岩や透緑閃石岩は「軟玉」とよばれている「玉…美しい石」です。その内部構造は長柱状または繊維状の結晶で、とても硬いヒスイ（硬度7）よりも粘りがあって、木を加工する「磨製石斧」には適しているようです。（ちなみに硬度5～6です。）人々はきっときれいな緑色というだけでなく、その石の特質を理解していたのでしょう。

またその産地はヒスイ同様、新潟県の青海町や糸魚川市周辺にあり、そこには磨製石斧を専門につくるムラ（長者ヶ原遺跡など）もみつかっています。東畑の製品もそんな石器づくりのムラから運ばれてきたのでしょう。

そしてその流通ルートとしては、飯川をさかのぼる糸魚川-大町-松本間、いわゆる「塩の道」ルートの可能性が高くなってきています。

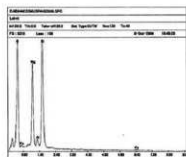


S2327  
(S=3:5)



#### 223 磨製石斧（透閃石岩）

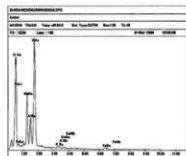
チャート図の波形が222と似ている。繊維状の構造を持つ石である。



S3559  
(S=1:1)

#### 220 平玉（蛇紋岩）

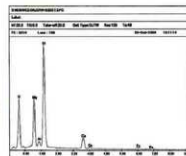
黒色で滑らかな石。蛇の皮のような模様をした岩石で比較的柔らかい。硬度2程度。



S3624  
(S=1:1)

#### 221 平玉（緑泥石岩）

緑色をした石。縄文のアクセサリーは緑色をしたものが多い。



S3557  
(S=1:1)

#### 222 垂飾り（透閃石岩）

軟玉と呼ばれる石。硬度5～6。緑白色に輝く。



石材名  
蛇紋岩  
3560  
緑泥石岩  
26,2799  
透閃石岩  
3102  
透閃石岩  
1607,3621,  
3022,3626  
塩基性片岩  
43,638,1281,  
2145

#### 224 さまざまな石材で作られた磨製石斧

変成作用を受けた石が多い。木を切り倒したり、加工したりする道具の石材として粘り強い石を選んでいる。

## 釣り針の形をした石器

海から山へ

**石器の発見** 平成15年8月、SB58住居跡を覆う土から、変わった形をした黒曜石の石器が、ほぼ無傷の状態で見つかりました。時期は一緒にみつかった土器から縄文時代中期後葉に属すると考えられます。

**石器の特徴** 形は「し」の字のように折れ曲がり、先端は鋭く、もう一方はつまみのように膨らんでいます。長さ3.1cm・幅2.5cmで、断面は丸みのある菱形をしています。つまみ側が平たく、先端部に向かうほど肉厚になっています。ていねいに形を整えています。刃物として使用できるような鋭利さはありません（写真49②・173、図52②・188）。

顕微鏡による観察では、表面全体に細かな傷がついていることがわかりました（52②）。全体の形から「釣針形石器」と名付けました。

現代の釣り針でいうと、先端部は魚を引っ掛ける「ハリ先」、つまみ部は糸を巻きつける「チモト（鉤元）」とよぶ部位にあたります。ただ黒曜石に弾力性がないため、実用には向かないという考え方が一般的です。

**縄文の釣り漁** 各地から出土する釣り針から、縄文時代に釣り漁が行われていたことは明らかです。しかしその素材のほとんどはシカの角や動物の骨です。また出土遺跡の分布は東北地方の太平洋沿岸地域に多く、長野県では栃原岩陰遺跡（南佐久郡北相木村）の縄文時代早期の釣り針が内陸部の貴重な発見例として知られています。

**周辺地域の石器** 長野県内では、縄文時代中期後半の三夜塚遺跡（山形村）や曾利遺跡（富士見町）などから鉤状石器とよばれる石器が20数例みつかっています。しかし、東畑のように釣り針とよぶにふさわしい石器はみあたりません。「し」の字に屈曲している点では、曾利遺跡の例があてはまりますが、「チモト」がないようです。

岐阜県では縄文時代中期の阿曾田遺跡（中津川市）から「鉤形石器」が3点出土しました。そのうちの1点は全体にずんぐりとしていて、長さ4.2、幅5.0、厚さ0.9cmとやや大形品です。つまみ部は大きいのですが、先端部が丸く、磨り痕から刃物としての用途も想定されています。

**信濃川流域の石器** 東畑に良く似た石器は新潟県で見つかりました。信濃川流域にある縄文時代中期前半の横割遺跡（十日町市）の「釣針形石器」です。この石器は「し」字状に整形し、「ハリ先」は尖り、明確な「チモト」があります。材料は鉄石英で、長さは東畑例と同じ3.1cmです。この横割遺跡は土器の



225 釣針形石器の出土した主な遺跡

東畑遺跡の石器ほどきれいに調整された石器はない。内陸地域の川沿いに多く出土している。

特徴や黒曜石製の石鏃がたくさん出土していることから、信濃（長野県）との結びつきの強いムラであったといわれています。これ以外にも津南町などから釣針形石器がみつかっています。

**石器の用途** 顕微鏡で見える細かな傷の様子から、おまつりの道具やアクセサリのように人々が触る機会が多い特別な道具ではないかという想定がされています。とすれば、釣り針に不向きな黒曜石を使う理由もわかります。また実用品の石鏃と違い、先端に出土量が少ないのも特別な石器だからなのでしょう。

800年ほど前の鎌倉時代、麻績御厨<sup>（麻績御厨）</sup>はサケ300尾や筋子を伊勢神宮へ納めていました。補助員さんの話では、昭和のはじめまで麻績川でマスを捕まえていたそうです。今でこそダム建設により、流れは変わっていますが、犀川や麻績川はつい最近までサケやマスが遡上する日本海とのつながりが強い川でした。

東畑で見つかった漁業の道具は石鏃1点だけです（49②・図173）。今はまだ内陸の遺跡で見つかった「釣針形石器」の用途を決めることはできませんが、川沿いのムラにおいて、漁業と関わり深い貴重な道具であることは間違いないでしょう。

今後の出土例の増加と研究成果が待たれる道具です。

## 縄文時代の信濃と越後の交流

### 平成16年度文化祭記念講演の記録より

新潟県の土器事情に詳しい寺崎裕助氏<sup>※</sup>に、縄文時代の越後と信濃との交流についてお話ししていただきました。ここにその主要な部分を紹介します。なおDISC-1に図版や写真を盛り込んで全文を収録しました。

#### はじめに

(出土する遺物を見てきて)地域圏というのはいつ頃からあるのだろうか、地域間の交流はどのようなのだろうか、そういう事を考えるようになってきました。

#### 海と山との交流、糸魚川から松本へ

特に私が考えているのは、海と山の交流です。(信濃と越後の交流の場合)千曲川から信濃川というルート。飯綱から黒姫、妙高山麓というルート。糸魚川から塩の道を通して松本街道へ抜けて松本方面へ行く(ルート)。板北村はそのルートの中に位置しますので(いいヒントがないかと思い、来てみると)期待通り、越後の土器が来ていました。

#### 新潟県の土器事情

ちょうど東畑遺跡に人が住んでいた頃、新潟県では火焔型土器が使われていました。

#### 火焔土器と火焔型土器

(新潟県における火焔型土器の出土する割合は)全体を10としたら1割にも満たないくらいです。(新潟で多く使用されていた土器は)縄文を施した後、ちょっと文様をつけるという地味な土器です。

#### 越後の土器は白い

信濃の土器は赤くて砂っぽく、越後とか北陸の土器は白くてキメが細かいのです。(東畑の土器は)上越市付近でつくられた土器の胎土によく似ています。



226 東畑遺跡の土器を手にとって説明される寺崎氏

#### シナノザカイという地名

(新潟県新井市で作業員がこの川の向こうは)昔はシナノだったと。だから“シナノザカイ”という地名だというような事を言っていました。(調査すると)ほんとにその川から向こうは信濃の土器が多い。越後の土器は数えるぐらいしかありません。

#### “糸魚川ブランド”の磨製石斧

糸魚川市の長者ヶ原という遺跡で(つくられているものと同じ形の)磨製石斧が東畑遺跡に来ています。…姫川に沿ってここまで来ている…。それから大珠の未製品が出土しています。(大珠は)アクセサリーでもっていたわけじゃない…「権威の象徴」とか「威信財」ですね。それらの格式があるムラじゃないともてない。…東畑遺跡は地域の中心になり得るムラであったといえます。

#### 越後タイプの石皿

(東畑にある舟形の埴は)越後の典型的な埴跡です。…(略)越後の人がここへ来ていた…東畑のムラの一員になって生活していたのでは…という事を推定できるわけです。

#### 交流は旧石器時代から

信濃と越後の交流というのは、いつ頃から始まったのか…。旧石器時代に、(野尻湖周辺の)日向林遺跡でナウマンゾウを捕っていた(略)磨製石斧…あれなんかもたぶん糸魚川の蛇紋岩じゃないですか。(そうすると、交流のはじまりは)旧石器時代ぐらいまでさかのぼることができます。

#### 山から海に続く縦のルート

縄文人というのは海から山、山から海へ抜けるそういう縦方向の領域をもっていたんじゃないか(最近の見解から)。その範囲の中で得られる資源をしようずに使って生活して、手に入らないものは交易などの手段を使っていた。…まさしく信濃と越後というのは、海と山でつながっている。今はたまたま新潟県、長野県というように分かれていますけど、(縄文時代には)同じ一つの括りだったのではないかなど…。(東畑遺跡を)見せていただいて、ますますそういう思いは強くなってきました。(拍手)

※寺崎裕助氏プロフィール

新潟県埋蔵文化財調査事業団 課長代理

1951年新潟県能生町生まれ

明治大学文学部史学地理学科 考古学専攻卒業

火焔型土器研究の第一人者

## 第4章

### 集落の移り変わり

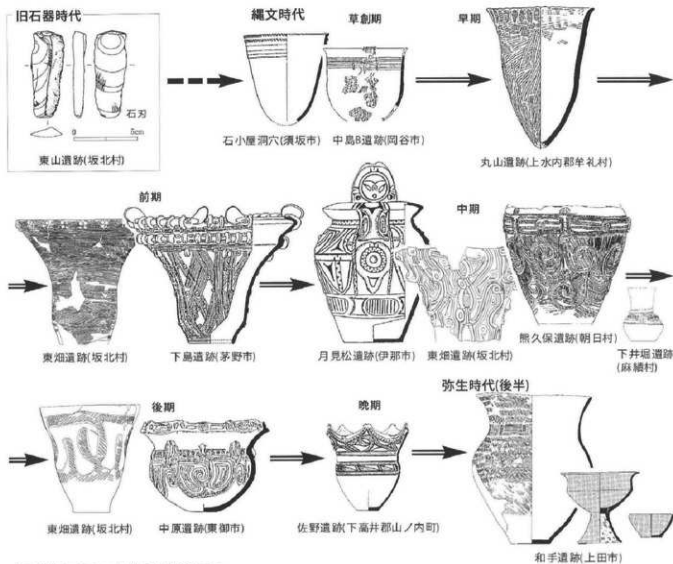


今から約 6,000 年～4,500 年前、東畑遺跡は出土した土器の時期によって、縄文時代前期後葉から中期をへて、後期前葉まで、1,500 年におよぶ長い間続いていたことがわかってきました。みつかった住居跡は 120 軒、穴の数は 740 基もあります。調査の写真や図面ではそれらは点在していたり、重複しあったりしています。その重なり方や、出土する土器の時期から、同じ時期に存在したと考えられる施設を分けてみると、時をへるにしたがって施設のつくられる位置が変わっていくことがわかります。9,000 m<sup>2</sup>を超える遺跡内でのように集落が移り変わっていくのでしょうか。



# 縄文という時代

その長さとも器からわかる時期区分



坂北村周辺の縄文時代略年表

時代	実年代	時期	坂北村周辺の歴史	代表する遺跡
旧石器時代	～15,000年前		石器を使って、獲物を追いつながらキャンプ生活をしていた。	東山遺跡(坂北村)
縄文時代	15,000年前～	草創期	土器が発明される。筑北ではまだこの時期の遺跡はみつっていない。	
	10,500年前～	早期	麻績川沿いにムラが生まれ、煮のついた土器が使われていた。	向六工遺跡(坂北村)
	7,500年前～	前期	広場やお墓をもつ大きなムラが出現する。石のアクセサリーが作られる時期。	東畑遺跡(坂北村)・東部八幡原遺跡(生坂村)など
	5,500年前～	中期	麻績川沿いに大きな集落がいくつも営まれる。土俵や石棒などのお祭りの道具が出現する。	東畑遺跡(坂北村)・唐原遺跡(本城村)・下井垣遺跡(麻績村)・東部八幡原遺跡(生坂村)
	4,500年前～	後期	遺跡数が減ってくる。北村遺跡から300体もの人々が眠る、たくさんのお墓があつた。	東畑遺跡(坂北村)・北村遺跡(明利町)
		晩期	麻績川沿いから人がいなくなる。	
弥生時代	2,800年前～		後半から人々が定着し、稲作農耕を始める。	向六工遺跡(坂北村)・竹之下遺跡(本城村)・立石遺跡(麻績村)

実年代は2003『筑北14年代測定と考古学』国立歴史民俗博物館を参考にしました。

## 東畑ムラ、1,500年の歴史

## ムラのはじまりから終わりまで

東畑ムラはいったい何年間、何代にわたって人々が暮らしていたのでしょうか。

文字資料のない数千年前のムラの姿を復元することは大変難しいことです。しかしみつかった住居跡の重なりあいや、遺物を比較していくと少しずつムラの移り変わりがわかってきます。

特に土器は形や模様の特徴が高い特質と出土量の多さから、地域の特徴や時期的な変化の様子をつかみやすい遺物です。

とはいえ、東畑ムラだけではその変化をとらえることは困難です。そのために考古学では周辺地域の土器の時期的な変化を示した物差しを使っています。この物差しを「編年体系」とよんでいます。こうした物差しづくりは日本各地で行われていて、ほぼ日本列島全体がつながっています。ですから、この物差しを使うと、東畑ムラと同じ頃の北海道や九州にあったムラの暮らしぶりを知ることができます。またこの編年体系はどんどん更新されていて、

より細かく比較できるようになってきています。最近では年代測定法の発展とともに、実際の年代（今から何年前などといった表記）も細かくあてはめられるようになってきました（45ページ）。

ここでは東畑ムラの土器を、中部高地の土器編年体系（物差し）にあてはめて、いったいどのような変化をしていくのか調べてみました。

そうすると東畑ムラは縄文時代だけで連続する18段階（小区分）に分類され、その幅は1,500年間にわたることがわかりました（66・67ページの表）。

しかし段階の間隔は均等ではないので、一世代分を示す場合と数世代分を示す場合があります。その細分は今後の研究成果を反映しながら、より正確になっていきます。東畑遺跡の報告も、体系上の空白地域であった筑北地区を埋める重要な成果となることでしよう。

では次のページから、各段階の住居や土器、石器の移り変わりをみていきましょう。

## 東畑遺跡の時期区分

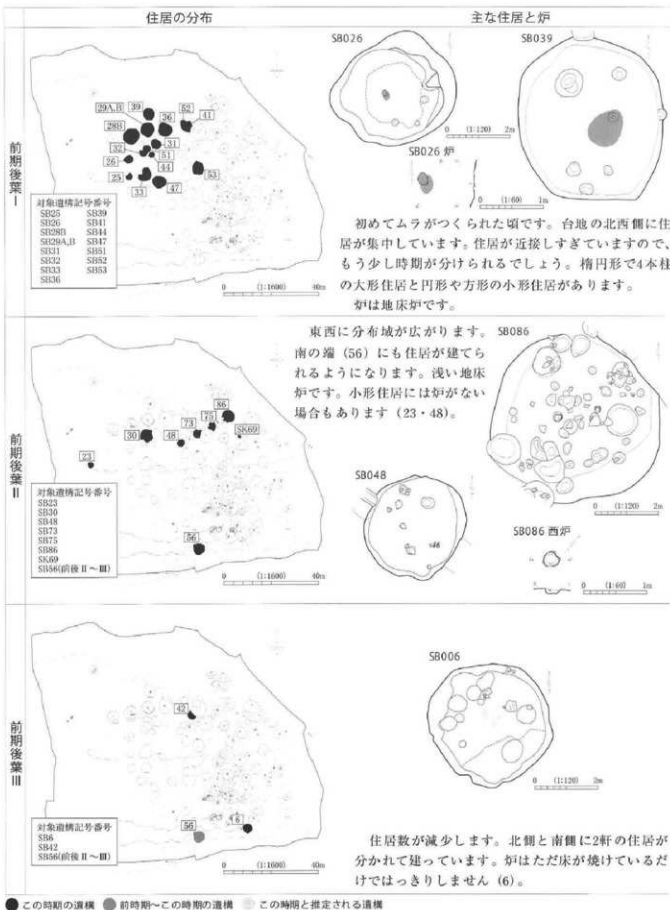
時代区分	大区分	中区分	小区分	型式名	土器の性格
縄文時代	前期	後葉	I	縄櫛 <sup>a</sup> 式併行	中部高地・関東地方の土器（縄櫛式土器）が主流。関西系の土器も出土。
			II	縄櫛 <sup>b</sup> 式併行	
			III	縄櫛 <sup>c</sup> 式併行	
		初期	IV	十三番段式併行	随片での出土が大半であり、良好な資料は少ない。
			I	五幅 <sup>α</sup> 台 <sup>β</sup> 式併行	
			II	五幅 <sup>α</sup> 台 <sup>β</sup> 式併行	
	中期	中葉	I	縄沢式併行	千曲川上流域に特徴的な土器（深沢系土器）。
			II	新道式併行	
			III	藤内 <sup>I</sup> 式併行	
		後葉	IV	藤内 <sup>II</sup> 式併行	千曲川流域に特徴的な「須野土器」と、中部高地の土器が出土。新潟県での出土もみられる。
			V	弁尹 <sup>Ⅰ</sup> 式併行	
			I	唐草文 <sup>I</sup>	
	II	唐草文 <sup>II</sup>			
	III	唐草文 <sup>III</sup>	在地土器（唐草文土器）とともに関東地方の土器（加曾利 <sup>Ⅰ</sup> 式土器）が出土する。		
	IV	唐草文 <sup>Ⅳ</sup>			
	後期	初期	初春寺式併行	関東地方、東北地方（大木式）の影響を受ける。	
		前葉	I	堀之内 <sup>Ⅰ</sup> 式併行	東北地方（網取式）の土器が出土し、強い関係性が認められる。
	II		堀之内 <sup>Ⅱ</sup> 式併行	土器はほとんど出土しない。	
平安時代		9世紀中頃～後半		住居跡1軒といくつかの土器が出土している。	

※東畑時期区分設定基準に関してはDISC-1参照。



# 住居の移り変わり

## 床面をくぼめた炉



はじめて暮らした人々



最も古い段階の土器群です。前の段階に多かった胎土の中に植物繊維を含む土器も残っています。

前期の石器はとても精巧につくられているのが特徴です。管玉や耳飾などのアクセサリ類も出土しています。



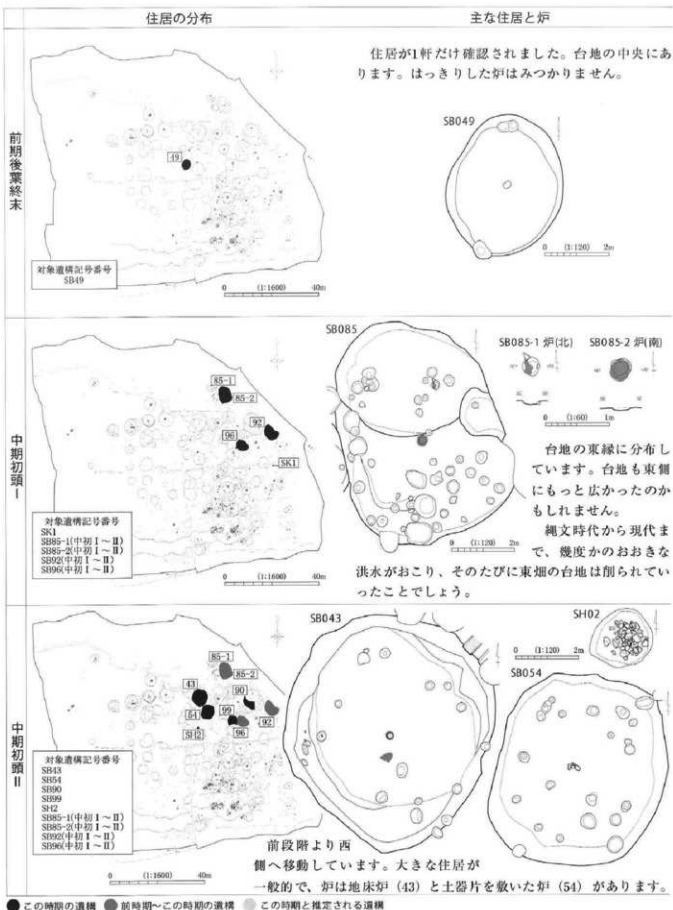
口にイノシシの顔をかたどった突起がつく土器があります。この時期の石器には石槍や石鏃が多く、狩猟が盛んだったようです。イノシシの顔がついた土器には豊猟への願いや感謝の意味があるのでしょうか。



この時期の土器は、ボタン状の粘土を貼ったり、細い粘土紐を貼ってその上に刻みを入れたりしています。P0005が古く、P0338が新しい特徴をもつ土器です。

小型の石器には黒曜石やチャートなどガラス質の石材が多く用いられています。石器は用途に応じて石材が選択されています。

前期から中期へ



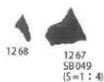
● この時期の遺構 ● 前時期〜この時期の遺構 ● この時期と推定される遺構

## 主な遺物 土器

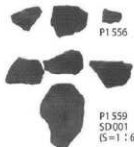
P0879  
SB049  
(S=1:3)

この時期の土器はほとんど出土していません。上の土器は胴下部の破片です。ボタン状の貼付文があり、前段階からの連続性が認められます。

## 石器

1268  
1267  
SB049  
(S=1:4)

前期から中期に移り変わるこの頃、人々の生活跡がたいへん少なくなります。もしかすると一旦、ムラが途絶えたのかもしれませんが。

P0600  
SK001(S=1:6)

P1556

P1559  
SD001  
(S=1:6)

この時期の土器は破片が多いのですが、SK001からまとまった土器が出土しています(P600)。お墓の副葬品かもしれません。

1011  
SB043  
(S=1:3)2764  
SB0922752  
SB043  
(S=1:3)

2745

2740

2728



2764



2737



3563



3562



2760



2727



3564

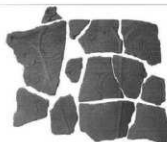


2741

SB№表記なし=SB092出土(S=1:4)

P0041  
SB090P0513  
SB093

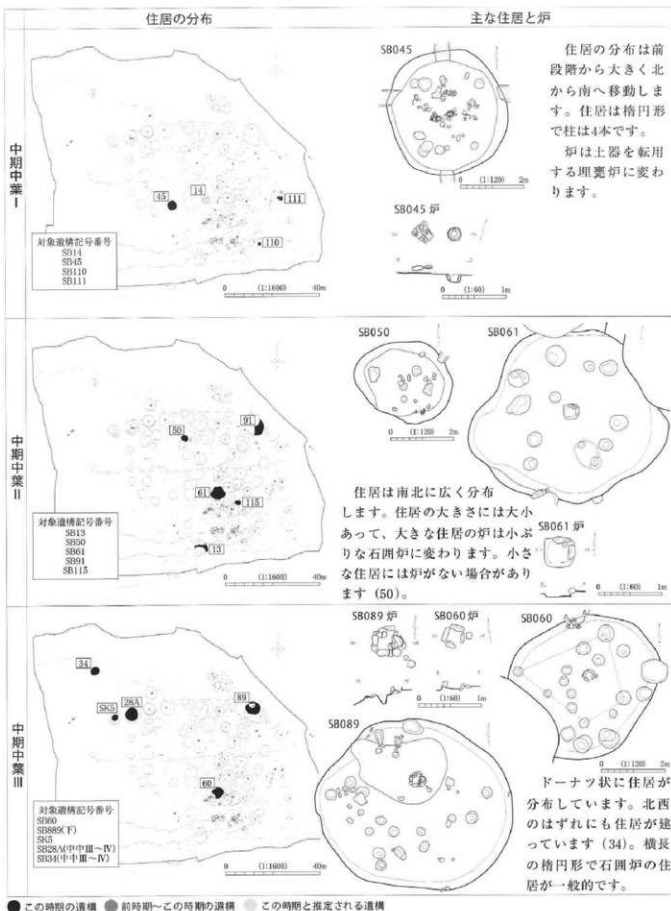
土器実測図(S=1:12)

P0514 SB043  
P0496 SB054  
(S=1:8)1362  
SB054  
(S=1:4)3563  
SB092  
(S=1:4)3626  
SB092  
(S=1:12)P0473  
SB054(S=1:8)P0477  
SB054  
(S=1:8)

中部高地や関東地方の土器とともに、北信地域を中心に分布する「深沢系土器」が出土します(P0473・477)。この土器は上越市からも出土していて、新潟側との関係がうかがえます。

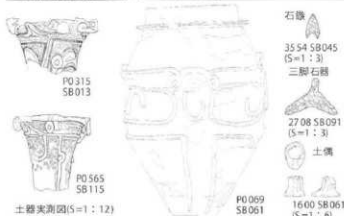
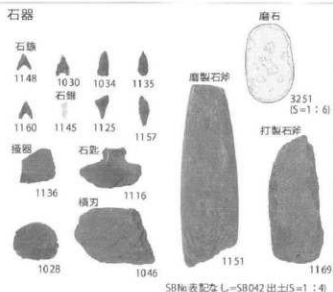
石器では糸魚川周辺に製作地(ムラ)のある磨製石斧が出土しました(S3563)。この時期から地域間の交流が活発化したようです。また、植物質食料を採集するための打製石斧・横刃形石器が増えています。

# 土器を使った炉、石でつくった炉

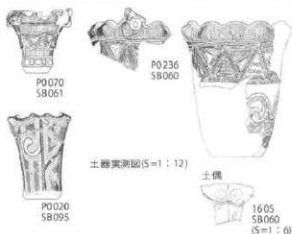




千曲川上流域を中心に出土する「後沖土器」(P0013)と、北陸地方の影響を強く受けた土器(P009・10・12)がめだちます。離れた地域との関係が強くなる時期のようです。



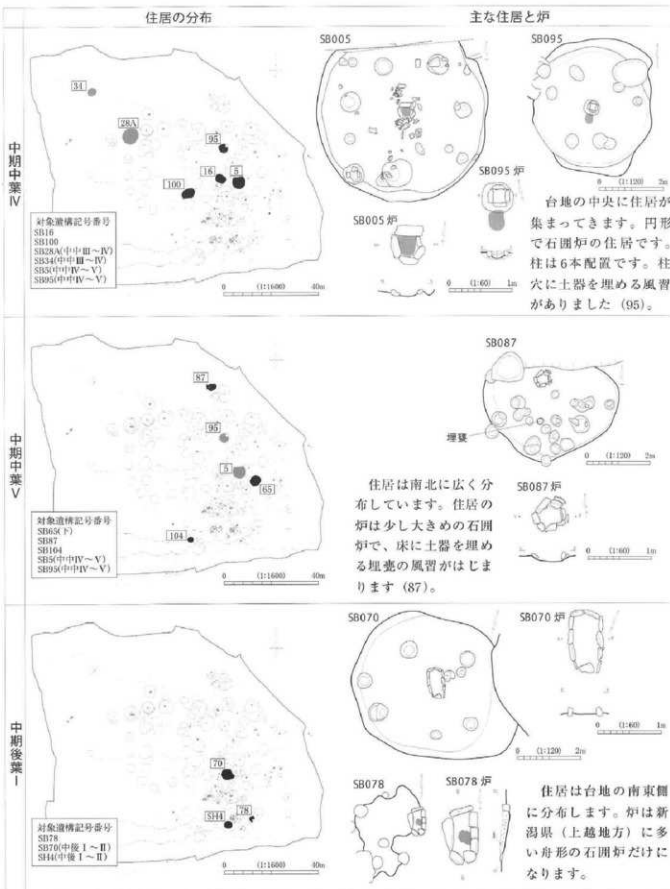
千曲川流域に分布する「焼町土器」の祖型土器がめだちます(P315・565)。また、大きな有孔鋤付土器(P0069)が出土しました。



中部高地や関東地方の土器(P0020・070・236)と千曲川流域の「焼町土器」が出土しています。



# 上越地方の炉



● この時代の遺構 ● 前時期~この時代の遺構 ○ この時期と推定される遺構

主な遺物 土器



土器実測図(S=1:12)

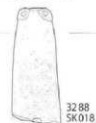
石器



SBNo表記なし=SB005出土(S=1:4)



石鏃(S=1:12)



前段階と同じように中部高地や関東地方の土器(P0047)と「焼町土器」(P0002・019・021)が出土しています。この頃の東畑ムラの「焼町土器」に良く似た土器が新潟のムラでもみつかっています。どんな関係にあったのでしょうか。



土器実測図(S=1:12)



中部高地や関東地方の土器が中心で、「焼町土器」がほとんど姿を消していきます。図のS3276は「多孔石」や「蜂の巣石」とよばれ、たくさんの凹みがあります。用途が不明の石器ですが、この凹みに木の実を置いて殻を割る道具であるとか、火おこしの道具であるとかといわれています。

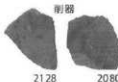


土器(S=1:6)



P1603 SB070 P1604 SB070  
土器実測図(S=1:12)

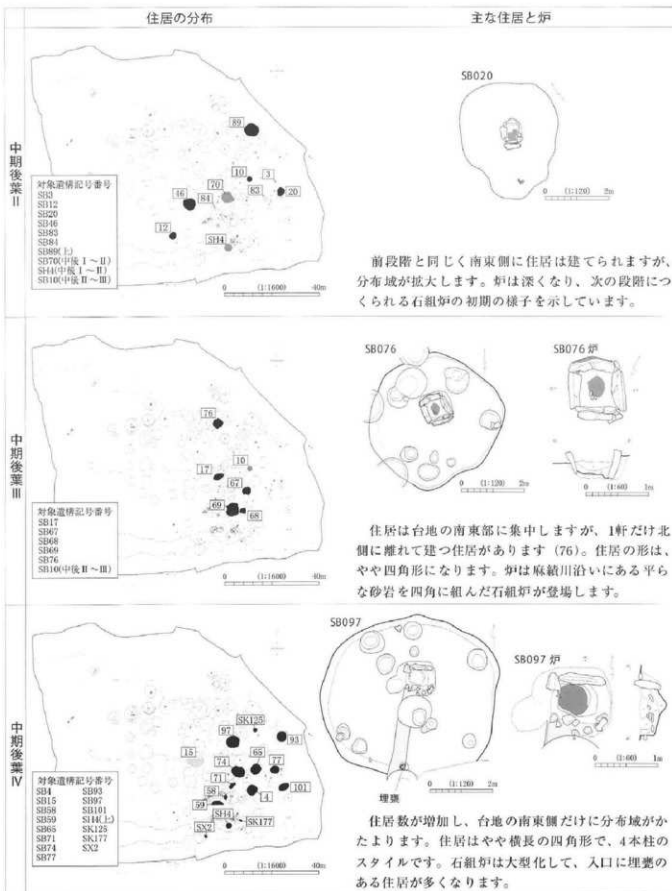
この時期から中・南信地域に分布する「唐草文土器」(P0166・167・173)が出現します。この土器の成立には新潟側からの影響が考えられています。またP0164のように東北・関東地方の影響を受けた土器も出土しています。



SBNo表記なし=SB042出土(S=1:4)



# 大型化する炉

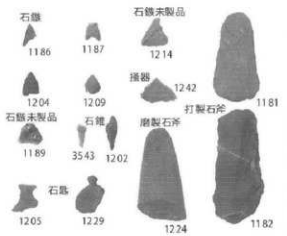


●この時期の遺構 ●前時期～この時期の遺構 ○この時期と推定される遺構

主な遺物  
土器

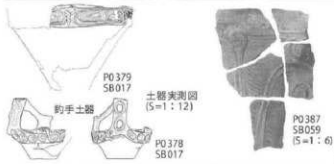


石器

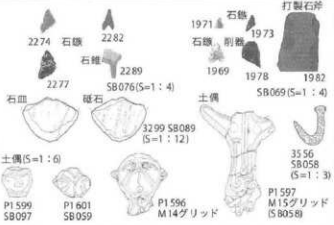


石器すべてSB046出土(S=1:4)

この時期の「唐草文土器」は口縁部の派手な把手と、胴部の細かい渦巻き文が特徴です。類似した土器が新潟側でも出土していて、地域間の交流があったことを示しています。P0007は唐草文土器の釣手土器です。また関東地方の土器(P0294)も出土しています。



唐草文土器が中心です。この時期の唐草文土器の渦巻きは胴部いっぱいに描かれます。また、八ヶ岳山麓を中心に出土する「曾利式土器」の釣手土器(P0378)が出土しました。内外面に炭素(スス)がたくさん付着しています。長い間、火を灯していたのでしょうか。



この頃、尾川流域に広く分布する特徴的な土偶が東畑でも出土します(P1596・1597)。また釣針形石器も発見されました。

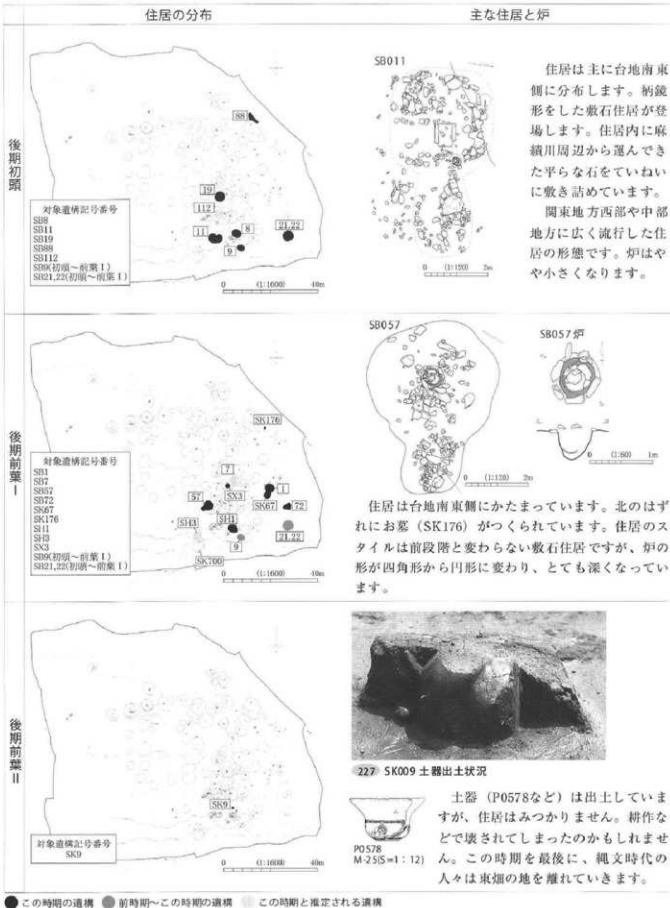


屋代遺跡群(千曲市)でも出土した東北地方南部の影響を受けた土器(P0004・534)がみられます。P0434は北信地域に特徴的な「圧痕隆帯文土器」と唐草文土器の中間型です。北信地域と中信地域の文化が共有している時期です。



SB№表記なし=SB042出土(S=1:4)

## 後期、縄文ムラの終わり



● この時期の遺構 ● 前時期～この時期の遺構 ○ この時期と推定される遺構

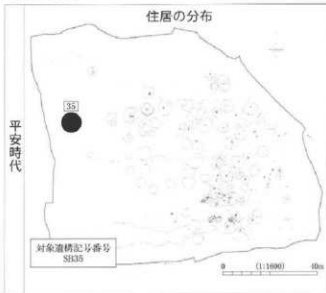
平安時代、再びムラがつくられる



SB11住居の埋壺 (P0006) は後期初頭の土器ですが、覆土からは中期最終末の土器 (P0261) も出土しています。ちょうど中期から後期への移行期にあたります。



東北地方の影響を強く受けた土器が出土しています (P0284・285)。この時期、深鉢・鉢・浅鉢・注口土器 (P0286・571) など、土器のパラエティーが最も豊富になります。



縄文時代から約3,000年経った平安時代、再び人々が東畑の地を開拓し、住居を建てます。耕作などで壊されていて、住居の詳しい姿はわかりませんが、カマドのある堅穴住居のようです。住居の内外から、その頃の素焼きの食器や雑業のかかった灰種陶器が見つかりました (P0580)。調査区では1軒しかみつかりませんが、小さなムラがあったのかもしれませんが。同じ頃、向六工遺跡にもムラがつくられています。

平安時代の人々が東畑を離れると、いつの頃からか現在のような農地として利用されるようになりました。



## 麻績川と東畑



229 麻績川と東畑遺跡  
(東上空より撮影)



230 遺跡の全景  
調査区中央の土層観察ベルトを挟んで、手前が記録保存範囲、奥（遺跡南側）が盛土保存範囲である。（北上空より撮影）

## 第5章

# 調査の記録



東畑遺跡の発掘調査は、県営のほ場整備事業に先立つ緊急調査という性格をもつ、開発を前提とした埋蔵文化財の調査です。準備段階からの経過をたどりながら、どのような契約ややりとりで調査が実施されていったのか、またどのような調査や保護措置がとられたのかを報告します。そしてその調査から得られた記録類の内容や出土資料の整理の状況、保管状況も報告します。



# 発掘調査が行われた理由

## 計画から調査まで

遺跡の歴史 「…以前より、畑から矢じりやツボのかけらが多く出土して、方々から多くの人が拾いに来ていました。昭和24年頃、畑を鎌や万能、スコップを使って人力で掘削して、開田しました。当時は桑畑だったので、春蒔きの葉桑を採取した後、小さな水田を何枚も造成して、桑株を残したまま田植えをしたことを覚えています。現在揚水している高い所（水槽）のあたりや、水路沿いから石器類が数多く出土しましたが、西側からはあまり出土していません。その後は本格的な遺跡発掘調査は行われていません。」（地権者：久保田義廣さんの話、平成14年1月10日村教委面談）

実際に24年当時出土した遺物は地権者の皆さんが大切に保管されています。

遺跡の保護 長野県松本地方事務所は中山間総合整備事業のひとつとして、東畑地区の水田を広く大きくすることを計画しました。そこで坂北村教育委員会は、平成14年1月17日、計画地内にある埋蔵文化財「東畑遺跡」をどうしたら保護できるか、地方事務所や村振興課、県教育委員会と話し合いました。

しかし地元にとって大切な事業であること、土を盛って遺跡を保護することはできないことがわかったので、まず試掘調査をして、遺跡の状況を判断することにしました。

試掘調査 試掘調査は地方事務所の要請を受けて、県教委の指導のもと、村教委で実施しました。2月

20～22日の3日間で対象範囲23000㎡に幅2m、深さ40～50cmのトレンチを重機で28ヶ所設け、調査をしました。その結果、事業地西側の約4000㎡の部分では今の水田から深さ20cm掘ったところで、たくさん土器や住居跡がみつかり、縄文時代前期～中期のムラが地下に眠っていることが明らかになりました。

調査計画 この調査結果から地方事務所、県教委、村振興課、村教委で話し合いをしました。遺跡を壊さないように工事を行うことはできないため、本格的な発掘調査をして、記録として遺跡を保存することが決まりました。調査は地方事務所からの委託を受けて、村教委が実施することになりました。また技術指導という立場で、長野県埋蔵文化財センターの職員1名が配属され、調査にあたることになりました。

本調査 すべての体制が整った平成15年度に調査を開始しました。調査を進めていくと、いたるところから住居跡や土器がみつかり、東畑ムラは縄文時代の人々が長く定住していた、県内でも屈指の遺跡であることが明らかになりました。

調査終了を予定していた8月、「どうやったら遺跡を守り、そして水田をつくる工事も予定通り終わらせるのか」そんな難問の答えを探して、関係機関で何度も話し合いがもたれました。そしてその間にも、記録保存としての調査は進みました。



231 区画整備事業範囲と試掘調査(薄い部分が本調査範囲)  
地形や遺物の散布状況から試掘溝(トレンチ)を設定する。

調査の流れ



232 調査開始式

坂北村の内外から多くの皆さんが参加した。



233 重機による表土剥ぎ

広い面積の表土剥ぎや土の片付けには大型重機が欠かせない。



234 地権者の皆さんへの説明

事前調査から地権者の皆さんのご理解を得た。濃密な縄文遺跡の調査も、多くの皆さんの理解と協力のお陰で順調に進んだ。



235 委託測量の様子

水準点の移動や基準点の配点、選構測量を委託した。測量データはすべてデジタル化された。



236 調査補助員による測量

細かな測量は補助員が担当した。初めての調査測量にも熱心に取り組んでいる。



237 村議会の視察

東畑遺跡の調査は平成15年度の坂北村重大ニュースに選ばれた。



# 遺跡を保護する

## 記録保存と盛土保存

**調査の変更** 9月、記録保存として全面発掘することは、期間からみても費用面からみても不可能になったので、県教委と村教委、県埋蔵文化財センターで話し合った結果、範囲の一部を盛土保存することを提案しました。この提案に対して、地方事務所は遺構が密集して、まだ調査の進んでいない南側5,000㎡について、最初の計画より水田を50cmかさ上げするという設計変更案を考えました。この変更事項を地権者の皆さんが理解していただいたため、一部記録保存（工事により破壊）、一部盛土保存という、調査途中ながら大変柔軟な答えを導き出すことができました。

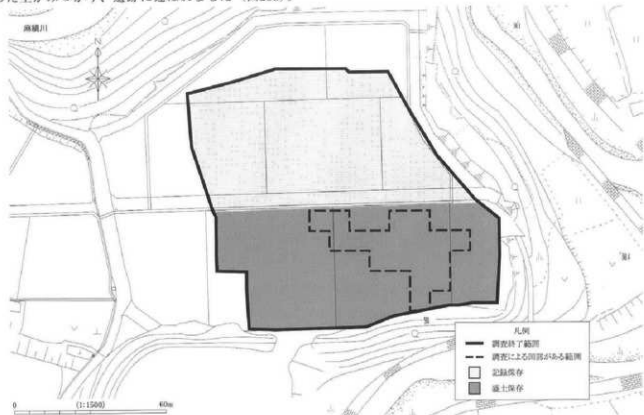
**記録保存** 9月現在調査が進んでいる住居跡などは、盛土保存範囲であっても調査を進めました。顔を出している多くの土器は盛土しても壊れてしまうため、取り上げました。そのため、盛土保存内の一部（図239の破線範囲）は調査による凹部ができました。盛土保存 砂で盛土保存をした青森県三内丸山遺跡の例などを参考にして、現在調査している面をはっきり区別できる土を探すことになりました。幸いに近隣の工事地から東畑の土とはまったく種類の異なった土が見つかり、遺跡に通ばれました（図238）。



238 遺跡を保護する土

遺跡を直接覆う土には、青みがかった差切トンネル掘削土（左）と黄色い小に断ダム掘削土（右）を選んだ。いつの日か再び調査するときに区別しやすくするためである。

**調査の終了** 盛土保存範囲で検出された遺構の輪郭はすべて測量し、畑などの壊れやすい部分を保護土で覆って、未来の調査に備えました。そして西の彼方にみえる鹿島槍ヶ岳が白くなった10月31日、すべての調査が終了しました。



239 記録保存と盛土保存の範囲

調査区の南半分には縄文時代のムラが今も静かに眠っている。

## 盛土保存の流れ

遺構を守る 石圍炉や敷石住居跡のように縄文時代の人々が残した構造物は、工事の際、重機が動いて壊してしまう可能性が高いので、村教委によって、人手でひとつひとつついでに保護土で覆っていきました。

盛土保存工事 5,000㎡という広い範囲に保護土を敷き詰める工事は地方事務所が担当しました。県教委と村教委、センターが作成した盛土保存の計画に基づいて、工事業者とも話し合いがもたれました。

保護土1層 運んできた保護土を10cmの厚さで均一に敷きならします。調査面を壊さないように慎重に進めていきます。

保護土2層 その上にガレキ混じりの土を20cmの厚さで敷きました。この層が新しい水田の基盤となります。



241 盛土保護工事の開始

調査した面から4層の土を重ねていく。新しい田んぼの面は60cm上に仕上がる。



243 保護工事の様子

キャタピラで調査面を傷めないように少しずつ土を敷いていく。



240 炉を保護する

大きな石圍炉をていねいに覆う。



242 保護用盛土を敷き詰める

盛土範囲には、保護土を厚さ10cmで敷き詰める。

保護土3層 さらに20cmの厚さで、比較的にきめのそろった土を敷きました。水田に入れる水が漏れないようにていねいになります。

表土（工事後の水田の耕作土） 昭和24年から丹精込めてつくってきた昔の水田の土は、調査の前に1ヶ所に集めておきました。その土を使って、新しい水田を造成しました。

工事の終了 雪の多い冬でしたが工事関係者の努力で、春先には何とか水田の形ができ上がり、水が入りました。麻績川をわたる風も暖かくなる5月、地権者の皆さんが待ちに待っていた田植えが始まりました。それと同時に遺跡の保存工事も終了しました。

## 遺物整理から報告書まで



244 遺物の洗浄作業

土器や石器についた土を洗い落とし、単調であるが、さまざまな土器の模様があらわれてくる瞬間でもある。



246 土器片を並べる

丸い土器もはじめは平らに並べてみる。こうしておく、と思わぬところから出土した土器片が接合することがある。



248 土器の接着復元

接着剤を使って土器を復元する。大きな土器ほど形がずれないように気をつけて作業を進める。



250 土器の展開写真撮影

土器を回転させながらフィルムに模様を写し込む。装飾の連続性がよくわかる。(p40-41参照)



245 土器の仕分け

ひとつひとつの土器に注記をした後、出土地点や土器の様様で分類していく。



247 土器を組み立てる

テープで仮止めて組み立ててみる。小さな破片が立体的に立ち上がる。



249 土器の補強復元

足りない部分を補強していく。細やかな心づかいが、縄文土器を生き生きとよみがえらせる。



251 コンピュータへの入力

記録期はすべてデータ化していく。報告書もデジタル編集して作成した。

## 調査日誌／整理日誌

## 【調査日誌（抄）】

平成15年		
5月1日	晴	調査準備の開始。
5月8日	雨後曇	地元説明会（日向公民館にて）。
5月9日	晴	調査範囲杭 打設。
5月15日	雨後曇	粘土厚確認調査開始。重機稼働初日。 当初計画外より住居跡1軒確認。範囲増大必至。
5月16日	晴	調査範囲杭の再打設。
5月20日	晴後雷	発掘作業従事者説明会。
5月26日	晴	調査前の遠景写真撮影を実施。プレハブ位置確認。表土厚確認報告書を振興課へ提出。
5月27日	晴	重機による表土掘り取り開始。
5月28日	晴	中期住居7軒確認。砲形尖頭器出土。
5月30日	晴	河岸段丘座の基盤層の探検。
6月5日	晴	開始式。表土掘りまで調査面積9,200㎡と確定。
6月10日	曇	M-15グリットより中期後葉の立像土偶出土。
6月11日	曇後晴	M-14から中期後葉の土偶頭部出土。
7月1日	曇後雨	坂北小1・2年生発掘体験。
7月2日		機械掘削終了。住居跡8軒以上。
7月4日	晴	坂北小3・4年生発掘体験。 5者協議（県、県教委、村、村教委、センター）。県内屈指の縄文集落の調査であることを、全者で認識。調査期間延長、10月末終了をめざす。
7月7日	雨後晴	坂北小5・6年生発掘体験。
7月24日		村教委、調査終了予定を11月末と設定。各方面への調整はかかる。
7月27日	晴	地権者向け説明会を実施。県道跡調査指導委員樋口昇一氏に遺跡の説明を依頼。調査延長の理解を求める。
8月5日		5者協議（県、県教委、村、村教委、セ）。記録保存経行か、一部盛土保存へ変更か。各者で検討課題とする。
8月6日	晴	村高齢者学識が現地見学。
8月8日	曇後雨	台風10号の接近。シート張りの強化、土壌の増量、散水用の蓋場の構木。
8月19日	曇	SBSの覆土から黒曜石製の釣り針出土。
8月21日		4者協議（県、村、村教委、セ）。一部盛土保存の方向に進む。調査方法と手順の変更。調査員として学生補充。
8月26日		3者協議（県教委、村教委、セ）。北側4,000㎡の記録保存。南3,000㎡の盛土保存という方針定める。
9月12日		5者協議（県、県教委、村、村教委、セ）。一部盛土保存、10月末調査終了決定。費用増額要望。
9月12日		地権者との協議。盛土保存について了承。ほ場整備5月竣工をめざす。記録保存範囲の終了計画立案、徹底。盛土保存の方法を計画。以上課題とする。
9月		10月より調査員員の増員決定。
10月10日	晴	ラジコンヘリコプターによる空撮実施。
10月18日	晴	現地見学会 見学者数293名を超える。
10月		盛土保存用の土を売却トンネル、小仁熊ダム工事掘削土から確保決定。
10月24日	晴	遺構調査追い込み。SB55ピット6から焼町土

器の底部欠損土器、SK67からヒスイと思われる易形器の石が出土する。

10月31日	晴	遺跡調査終了式。盛土保存打合せ（施工業者）。
11月20日	曇後雨	調査範囲の作成。現場作業員へのスライド上映会（会議室にて）。
11月25日	雨	報告書草案作成。遺構台帳の整備。写真注記の点検は終了。
12月2日	晴	骨の分類。
12月5日	晴	業者測量図の点検作業。基礎整理計画、本格整理計画立案。
12月8日	晴	遺物の点検作業終了。
12月12日	曇後雨	次年度、受託事業（東進道跡の報告書作成）の方針打合せ。わかりやすい報告書とデータベースの整備を主眼とする方針。

平成16年

1月5日	晴	遺物の洗浄作業（～1月28日）。
1月6日	雪	遺物台帳のPC入力作業（～1月27日）。
1月13日	晴後雷	図面照合作業（～3月1日）。
1月26日	晴	H15年度の精算作業。H16年度の予算策定。
1月28日	雷後晴	写真台帳のPC入力作業（～3月1日）。
2月5日	晴	土器の地点別分類作業の開始（～2月27日）。
2月17日	晴	現地の復整。（遺跡内の丁張、表土掘り終了確認）。
3月2日	曇	石器の分類（～3月8日）。図面の修正（～3月22日）。
3月3日	曇	現場の点検。盛土保存の第1層敷き終了。
3月8日	晴	全体図作成（～3月17日）。
3月23日	雪	京都大学茂原先生による出土骨類の鑑定。
3月25日		基礎整理作業終了。

## 【整理日誌（抄）】

平成16年		
4月13日		土器分類・整理開始。
4月21日		土器の重量計測・接合（～10月22日）。
5月		現地にて田植え始まる。
5月17日		土器注記開始（明治大学黒曜石研究センターにて）。（～7月1日）
7月2日		土器登録・メセ写真（～10月22日）。理文センターにて土器復元開始（～10月15日）。
10月		現地にて慣例り始まる。
10月6日		県立歴史館で石器を分析（～10月11日）。
10月18日		実測用器目録開始。
10月18日		村文化祭 記念講演会 速報開始する。
11月6日～12月24日		速報展開催。見学者467名。
11月9日		土器分析・土器重量入力（～H17年1月31日）。
11月9日		寺崎先生のテープ起こし（～11月22日）。
11月13日		遺物写真撮影（～H17年1月24日）。
11月24日		実測図点検（～H17年2月10日）。
12月9日～10日		福祉センター大会議室にて土器写真撮影。
12月17日		信州大学理学部原山先生による石材鑑定。
平成17年		
1月～		報告書の原稿執筆開始。
2月～		報告書編集業務開始。
3月1日		印刷製本を業務委託。
		報告書とCDデータの原稿校正。
3月～		遺物の収納・管理台帳作成。
3月25日		発掘調査報告書刊行。整理作業終了。

## 調査費用／事務手続き

調査費用と事務手続きについて報告します。

### ○ 調査費

【平成15年度】	総額	43,305,950円
(内訳)	松本地方事務所	36,810,000円
	坂北村	3,248,950円
	国庫補助金	3,247,000円
【平成16年度】	総額	30,000,000円
(内訳)	松本地方事務所	25,500,000円
	坂北村	2,250,000円
	国庫補助金	2,250,000円

### ○ 事務手続きの流れ

#### 【平成15年度】

平成14年	11月 14日	文化庁あて国庫補助事業計画提出。
平成15年	4月 7日	国庫補助金内定通知（4月7日付）。
	4月 16日	国庫補助金申請書提出。
	5月 1日	県埋蔵文化財センターと技術指導委託契約の締結。 (契約期間：5月1日～3月31日)
	5月 20日	地方事務所へ事業計画書提出。
	5月 30日	国庫補助金交付決定通知。
	8月 8日	地方事務所との受託契約の締結。 (契約期間：8月8日～3月25日)
	11月 14日	次年度国庫補助事業計画提出。
	12月 20日	松本地方事務所長へ発掘調査完了報告書提出。
平成16年	2月 4日	国庫補助金変更承認申請（増額変更）。
	3月 1日	県埋蔵文化財センターと契約変更（減額変更）。
	3月 5日	国庫補助金変更交付決定通知。
	3月 11日	地方事務所との変更契約（増額変更）。
	3月 25日	松本地方事務所長へ実績報告書提出。
	3月 31日	松本地方事務所 竣工検査合格。
	3月 31日	国庫補助金実績報告書提出。

#### 【平成16年度】

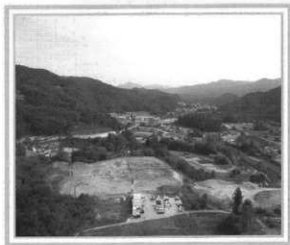
平成16年	4月 15日	地方事務所へ事業計画書提出。
	4月 15日	国庫補助金内定通知（4月13日付）。
	4月 21日	地方事務所との受託契約の締結。 (契約期間：4月22日～3月15日)
	4月 21日	国庫補助金申請書提出。
	5月 6日	県埋蔵文化財センターと技術指導委託契約の締結。 (契約期間：5月6日～2月28日)
	6月 16日	国庫補助金交付決定通知。
平成17年	1月 27日	県埋蔵文化財センターと契約変更（減額変更）。
	3月 14日	地方事務所との変更契約（内容：3月25日まで期間延長）。
	3月 25日	松本地方事務所長へ発掘調査報告書・実績報告書提出。
	4月 8日	国庫補助金実績報告書・調査報告書提出（予定）。

## 第6章

# これからの東畑遺跡



予想をはるかに超える大規模な縄文時代の集落であることがわかった東畑遺跡。村民のみなさんは、現地見学会や速報展を通して、はるか5千年前の郷土に生きた先人の暮らしぶりに驚き、深い興味をもっていただきました。東畑遺跡は地域の歴史を考えると、どのような意味をもつのでしょうか。そして「共有の財産」である土器や石器といった出土資料、保存された遺跡をわたしたちがどのように活用することができるのでしょうか。調査から得られる成果と課題、平成15・16年の事業内に公民館活動として実施した普及公開活動の成果から「これからの東畑遺跡」を考えてみましょう。



# 遺跡に訪れた皆さん

## 先人の文化との出会い

遺跡調査と村民のみなさん 地元の教育委員会が はじめて手がける埋蔵文化財の調査に、村の皆さんも注目されていました。そこで調査はできる限り、一般に公開することとしました。車で遠方からいらした村外の方、お盆の里帰りの途中で寄られた方、野良仕事の合間に立ち寄られた方、自転車車で数人の仲間とやって来た小学生。東畑で新たな縄文文化が明らかになるに従い、その数は増えてきました。

夏以降、見学者のいない日はない位、地域の皆さんに見守られて調査が進みました。



252 小学生の調査体験

土の中から土器や黒曜石が出てくることが不思議な様子。埋蔵文化財との初対面である。

### 坂北小発掘調査体験（平成15年7月1日～7日）

学年ごと順番に、全校児童が調査を体験しました。先生も初めての体験に、少しぐらいの雨を忘れて、黒曜石や土器の発掘に熱心に取り組まれていました。畑の下に数千年前の縄文遺跡が眠っていることはとても新鮮な驚きだったことでしょう。



253 土器洗いの体験

ていねいに洗う。こんな模様ができたよ。みんな真剣に取り組んでいる。



254 秋晴れの見学会

300名を超える見学者が訪れた。「坂北村にこんな平らな場所があったんだねえ。」「川が近くて住みやすかったんだね。」縄文人が見た風景が残っている。



255 実際にみると面白い

遺構や遺物を直接みてみると、驚きの連続である。先人の知恵を実感する。

### 現地見学会（平成15年10月18日）

秋晴れの東畑ムラに、300人を超える見学者が訪れました。どの方も、遺跡からみわたせる風景に感動されていました。そして出土した縄文時代の土器や石器の多さに驚きながら、「昔の人はいい場所をちゃんと知ってるねえ。」と納得されていました。

一部を盛土保存する保護工事の説明にも「全部壊してしまうのは本当にもったいないものね。」と同感していただけました。

### 「縄文大集落みつかる。」HIGASHIBATA



256 見学会ポスター

## 子供たちと縄文時代

## 坂北小の縄文体験（平成16年7月25日）

6年生が村の大会議室で土器の接合や石器の使いかたに挑戦しました。社会科の教科書に載っている縄文時代の土器や石器が自分たちの村にもあることを目と耳と手を使って、実感してもらいました。



## 257 縄文時代ってどんな時代かな

実際に土器に触ったり、石器の使い道を考えてみたり、教室ではできない学習である。

## 千葉市山村留学児童の縄文体験（平成16年8月2日）

夏休みに村を訪れた千葉っ子が、山の縄文ムラの土器に触ったり、千葉にある海の縄文ムラや貝塚と比べてみたりしました。こんなに離れた場所なのに、土器や石器がよく似ているなんて、うまく想像できないようでした。



## 258 東京湾の遺跡と比べる

海と山の遺跡の似ているところや違うところを実物で考えてみる。

## 聖南中の縄文体験（平成16年8月27日）

本城村と組合立の聖南中学校の1年生が、歴史授業の一環で、東畑の縄文文化を学びました。土器の接合では、土器の装飾がきちんと計算されていることを実感し、人類学上、今と変わらない人々が数千年前の筑北の谷で、工夫しながら生きていた歴史を学びました。

また2ヶ村の遺跡地図に自分の家の場所をマークしてみ、身近な場所に遺跡があることを知りました。



## 259 自分の住む村の歴史

何千年も前の遺跡でも、自分たちの住む村にあると、とても身近に感じる。



# 東畑遺跡速報展

## 谷あいに生きた縄文人の暮らし

縄文土器を描く（平成16年10月1日・15日）

図画や美術の対象として縄文土器を教材に選びました。坂北小6年生は、図画工作室の床に腹ばいになって、縄文土器の渦巻きを目で追っていました。

聖南中では、整然とおかれた縄文土器をいろんな角度からみつめ、コンテでデッサンし、水彩絵の具で彩色しました。縄文の構図のすばらしさを実感し、自らの作品へと昇華させているようでした。

描きあがった作品は、「ひとりひとりの縄文土器」に仕上がりました。作品は速報展に展示されました。



260  
縄文の芸術に挑戦する

土器を描いてみると、その芸術性の高さが良くわかる。子供たちの作品もとてもすばらしい。

アンギン編み講習会（平成16年10月16日）

原始の編み物「アンギン」を、村の皆さんが講習されました。長野県立歴史館（千曲市）との共催事業として、学芸員を講師に招きました。参加された

8名の皆さんが作られた作品に、東畑の縄文土器を並べてみると、堅く住居での暮らしが頭に浮かんできました。



261 アンギン編み

東畑遺跡速報展（平成16年11月6日～12月24日）

「東畑はあれからどうなったんだろう。」現地見学会から1年。整理作業がすすんだ調査資料を一般公開しました。村歴史民俗資料館をそっくり模様替えて、展示室2ヶ所を縄文時代展としました。

1階には、13年ぶりに県立歴史館から里帰りした向六工遺跡の土器や近隣の村から借用した土器や石器を展示しました。また児童生徒の縄文土器の絵も展示しました。

2階の展示室はすべて東畑遺跡の調査資料で埋め尽くしました。壁面には調査の流れに沿うように写真パネルを掲示しました。フロアの中央には復元された土器を集合させて、立体的に露出展示しました。

正面の陳列ケースには、有孔鈎付土器をはじめとする東畑を代表する土器を陳列しました。人体文のついた土器は自動の回転台を使って土器の全周をみていただきました。

斜めのガラスケースには、近づいて見たくなる土偶や石器、骨類を種類ごとに展示しました。また石皿や土器のかけらは手にとって触れるように並べました。

準備は公開日まででしたが、初日から100名を超える観覧者が訪れ、土器や石器を身近に実感してもらっている姿を見て、疲れを忘れてしまいました。

村の皆さんは「自分たちの村の宝」という思いをもっていただきました。村外の皆さんは小さな山村の小さな資料館にわざわざ足を運ばれて、資料の豊富さにびっくりされていました。

村教委が初めて調査した村の遺跡を、村の資料館で公開した速報展は、村内外より465名の観覧者を集め、12月24日に無事終了しました。



262 速報展の準備風景

現代の私たちが、縄文時代をわかりやすく伝えることは難しい。

平成16年度坂北村文化祭（平成16年11月6・7日）

テーマを「縄文時代」に絞り、新潟県寺崎裕助氏による講演会「土器から見た信濃と越後の交流」、  
「縄文のアクセサリ作り体験」（共催：長野県立歴史館）、  
「東畑遺跡速報展」開幕という企画を実施しました。



263 土器の展示風景  
復元された土器が一堂に会する。

講演会には78名の皆さんが集まり、縄文人の行動範囲の広さと文化の深さに驚かされていました。



264 文化祭当日の館内  
記念講演会とともに、大勢のみなさんが観覧された。

アクセサリ作りでは100名を越す皆さんが、歴史館学芸員から手順を教わって、思い思いのアクセサリを作りました。仕上げの磨きでは手も服も顔までも真っ白になりながら、1時間もすると素敵な



265 アクセサリー作り

大人も子供も夢中で石を磨く。縄文時代のふりでした。人々の技術と苦勞を体験する。

作品を首にかけていました。資料館前のテントからひと気がなくなることがないくらいの盛況

266 触るとわかってくる



園児はいろんな縄文人を想像していく。聞いている私たちも楽しいひとときである。

園児の資料館見学(平成16年11月16日)

坂北保育園の園児25名が歩いて資料館にやってきました。縄文時代の紙芝居を、上演するこちらがおかしくなるくらい神妙に聞き入ってくれました。

実際に土器のかけらの模様を迷路のように指でなぞってみたり、鼻の頭をガラスに押し付けて土偶の顔とにらめっこしたりする姿はほほえましいばかりでした。

「私も土器握ってみたい。」「俺のうちに石器あるぞ。」最後はみんな笑顔で園へ帰っていきました。



267 速報展のポスター

## 資料の保管と遺跡の現状

資料の管理 出土した資料、調査の記録類のすべてを村教育委員会が保管しています。坂北村歴史民俗資料館の収蔵庫に土器や石器を収納しました。記録類も資料館の資料室に保管してあります。

土器や石器は、報告書に掲載した資料、掲載されなかった資料を区別して、紙製の仕分け箱とコンテナボックスを使って収納してあります。今回の報告で細かな分析ができていない資料が多いため、今後、資料研究をされたい方が検索できるような収納台帳も用意しました。

復元されていない土器は、扇形に開いた状態(36ページ図106参照)で収納してあります。今後の資料館整備事業や公民館活動で土器を復元しやすい収納を



### 269 土器の登録カード

登録した土器にはカードを付けている。収納台帳から通し番号で検索できるようになっている。めざしました。

また報告書作成によって蓄積されたデジタルデータは、外付けのハードディスクとCDへ保存し、今後の利用に備えてあります。

遺跡の現状 事業終了後、初めての稲刈りも無事終了しました。調査区の中央を東西に走る農道の北側の低い水田が記録保存された部分、南側の一段高い水田が盛土保存された部分です。

見わたす風景は数千年前、縄文人が見た頃とそれほど変わらないことでしょう。資料館に陳列されている土器や石器ばかりではなく、この風景と水田に守られている東畑遺跡も、地域の大切な文化財といえるでしょう。

報告書刊行の頃、地権者のみなさんから「ぜひ東畑ムラに縄文人が暮らしていたこと、そして調査した遺跡が水田の下に眠っていることをしめす記念碑



### 268 石器の収納

種類や地点ごとに収納する。収納台帳に記録しながら作業を進める。



### 270 遺物収納箱

資料館の収蔵室に箱番号を付けて収納している。



### 271 事業終了後の現地

平成16年の春には無事に作付けができた。

を建てたい」という要望の声も聞こえて

きました。

### 272 平成16年秋

保護された縄文ムラの上に稲穂が実る。

# 坂北村と東畑ムラ、これから



273  
ひがしばた通信第273号  
整理作業の様子、  
釣り針の話  
(平成16年7月発行)



275  
ひがしばた通信第275号  
縄文芸術に挑戦、  
有孔罎付土器の話  
(平成16年12月発行)



館報さかきた  
274  
ひがしばた通信第274号  
千葉つ子の体験、  
埋蔵の話  
(平成16年9月発行)



276  
ひがしばた通信第276号  
関心を集めた速報  
展、縄文時代ってど  
んな時代？  
(平成17年2月発行)



坂北村と東畑ムラ 坂北村は現在、隣接する坂井村と本城村との合併を計画しています。

明治8年（1875年）に刈谷沢村、中村、青柳町村、竹場村、仁熊村、別所村、萩新田村の7ヶ村が合併し、現在の坂北村（当時：坂北村）が誕生してちょうど130年。ここに新たなスタートを切ろうとしています。

新村名も「筑北村」と決まり、平成17年10月の合併を目指しています。人口の流出、少子・高齢化、行財政の硬直化といった問題を、より向上性をもって解決すること、そして「自然に恵まれた安心と活力のあふれるむら」を将来像のテーマとし、今も3ヶ村での調整が進められています。

豊かな自然と共生し、周辺地域との交流を重ねながら、1,500年間も暮らして続けた東畑の縄文人。その遺産と向き合うと、合併事業のサブテーマ「～外に開かれ、中で支えあう、新しい連携と住みよいむらづくりをめざして～」の答えがみつかるかもしれません。



277 坂北村歴史民俗資料館  
本庁の旧役場庁舎を展示室として、鉄筋コンクリート通りの収蔵設備を併設している。  
(問い合わせ先)  
坂北村教育委員会  
電話0263・66・3657  
電子メールアドレス:kyouiku@vill.sakakita.nagano.jp

## 成果と課題

### ☆明らかになったこと、★明らかにすること

#### 全体として

- ☆ 東畑遺跡は縄文時代前期後葉から後期前葉（今から6,000年～4,500年前）まで、長期間継続して営まれた集落遺跡であった。（→第4章）
- ☆ 麻績川水系における縄文時代の集落調査は、向六工遺跡（坂北村・早期）以来2例目である。地域史の空白部分であった縄文時代前期から後期の調査資料が充実した。（→第1章12頁）
- ☆ 隣り合う地域、遠い地域との交流をしめす資料がたくさんみつかった。  
北から南へ、西から東へと、現代…産業・経済の要路、江戸時代…善光寺街道、古代…東山道（官道）の支路が通過し、モノとヒトの往来が盛んな筑北地区の地域史をさかのぼる歴史資料が蓄積された。（→第3章）
- ★ 東畑遺跡の調査資料を精査し、より細やかな考古学的特徴をとらえる。
- ★ 東畑遺跡の調査資料を基点として、水系における縄文時代の資料を掘り起こし、分布範囲（横軸）と時期幅（縦軸）の研究を進める。

#### 集落について

- ☆ 東畑遺跡で発見された住居跡数は120軒（うち完全な記録保存83軒）。平安時代の1軒以外、すべて縄文時代の住居跡であった。住居跡は時期ごとに居住域を変えている様子がとらえられた。（→第4章）
- ★ 土坑740基（うち完全な記録保存215基）と住居跡との関連性をとらえる。その結果から、なぜ人々は東畑の地に長い間ムラ（集落）を営んでいたのかという疑問の答えを探す。

#### 遺物について

- ☆ 遺構出土の土器や石器は、短期間であったがひとつとおり概観できた。その結果を集落変遷や、生業復元に結びつけることができた。（→第2章、第4章）
- ☆ 動物骨の鑑定結果から、当時の狩りの獲物、食生活の一部分がみえてきた。（→第2章51頁）
- ☆ 土器の年代測定結果から、東畑の時間的な位置が定められた。（→第2章45頁）
- ☆ 石器の石材分析から、日本海沿岸域（新潟県）との交流が明らかになった。（→第3章62頁）
- ★ 土器や石器を周辺資料とより詳細に比較検討し、麻績川流域特有の土器や石器があるのか、あるいはすべてが周辺地域からもたらされてきているのかを調べる。

#### 地域の文化財として（☆現在 ★未来）

- ☆ 筑北地域を代表する、埋蔵文化財の一般資料が出土した。（→坂北村歴史民俗資料館へ）
- ☆ 村の皆さんが、自分たちの住む村の先人たちの暮らしぶりを目のあたりにすることができた。（→第6章）
- ★ 保管されている資料を、広く生涯教育の場で活用していく。
- ★ 詳細な埋蔵文化財分布調査を実施して、地域史解明の基礎資料づくりに努める。



「筑北の谷」にある縄文集落。筑北の谷とは、周辺地域からみた筑北地区の呼び方のひとつです。険しい峠道か、細い谷沿いの道からでしか入ることができない、やや閉そく感のある地域という印象が、この呼び方の由来かもしれません。

現在の地域交流の要路、長野自動車道の建設に先立つ埋蔵文化財調査は今から14年前に実施されました。坂北村の高速バス停の下、東条川左岸の台地上に今から7,500年前に営まれた縄文時代早期のムラ、向六工遺跡がみつかりました。

詳細な遺跡分布調査も集落遺跡の調査例もないこの地は、考古学研究、特に縄文時代研究における空白地域でした。しかしこの向六工遺跡の調査成果は、この谷を流れる麻績川流域には、未だいくつもの縄文ムラが眠っていることを想像させてくれました。

そしてこの想像が現実となって、私たちの眼前に姿をあらわしたのが今回の東畑遺跡でした。ここで縄文時代の人々は、周辺各地との交流を重ねながら、1,500年もの間継続して集落を営んでいたのです。全国的に大きな集落遺跡が増加する縄文前期から後期に当てはまる遺跡とはいえ、まさか筑北の谷にこんなに大きな集落があったとはというのが、調査当時、地域の研究者の誰ももった感想でした。

坂北村教育委員会始まって以来の埋蔵文化財保護事業が、県内でも屈指の縄文集落の調査例となったのです。また全面記録保存を目的とした本調査の途中で、一部を記録保存し、一部を盛土保存するという保護方法の変更措置は、関係者と関係機関の遺跡保護への深い理解と迅速な対応がなければ、これほどまで順調な工程で進むことはなかったでしょう。

遺跡（埋蔵文化財）は、先人たちが大地に刻んだ大切な遺産です。地域史の空白部分を埋めるにふさわしい遺跡の全面調査ですから、研究者でなくともそのすべてを明らかにしたいという欲求はあるものです。しかし日本各地で記録保存という名目で削られ、消滅していく遺跡が日々増加していくなかで、たとえ一部分であっても先人の刻印を消すことなく

厚く土で保護し、未来の人たちへ受け継いでいけることができたことは、調査者として非常に嬉しい事例となりました。

また調査を進めてい

くにつれ感じたのは、村民の皆さんの調査や縄文遺跡に対する関心の高まりでした。

小学1年生から高齢者学級の皆さんまで、本当に多くの方々に、先人の遺産を体感していただきました。あるときは見つかったばかりの遺構を目に焼きつけて、あるときは土まみれの新鮮な遺物を手にとってその感触を覚えていていただきました。図面や写真では残せない大切な遺跡の記憶を、訪れた皆さんおひとりおひとりが持ち帰っていただけたのは、盛土保存と同じくらい大切な意味があります。

村民の皆さんにもっと東畑遺跡を記憶しておいてほしい、そうした意識をもって本書を刊行いたしました。

調査と整理から明らかになった東畑の縄文人の暮らしぶりを、調査遺跡で実際に見た印象と重ね合わせながらお読みになって、理解していただくことも大切な記録保存の方法といっております。

一方、地域史また縄文時代の研究においても欠くことができない調査資料であることも事実です。短期間の調査と整理ですから、そのすべてを網羅し、細かな観察ができたわけではありません。そのため、1年間に蓄積した記録類は体裁を整え、できる限りCDへ収めました。それらの記録類と対照しながら、調査研究を進めていただけるように遺物をはじめとする調査資料の整理と取納をめざしました。将来、本書をたたき台として実物を手に取りながら研究者が集う機会があることを願う次第です。

また、本書をお読みの一般の皆さんにも、ぜひ筑北の谷を訪ねていただきたいと思います。谷とはいえ、小盆地が各所に広がり、修那羅の石仏（坂井村）、善光寺街道沿いの立峠（本城村）、青柳の切り通し（坂北村）、中世山城の麻績城（麻績村）、青柳城（坂北村）、積石塚古墳の安坂葺軍塚古墳（坂井村）に代表される、大地に残された文化財も点在しています。

現在坂北村と本城村、坂井村は平成17年10月合併を予定して、新村「筑北村」の誕生を目指しています。村名は変わりますが、歴史遺産は変わらずに私たちに先人の深い文化と知恵を教えてください。

本書がそんな筑北の谷の歴史への招待状となり、訪れた方が東畑の地から変わらぬ風景を眺め、川風に吹かれてページを繰っていただけたなら、そのときこそ「谷あいにはきた縄文人のくらし」が生き生きとよみがえる瞬間ではないかと感じております。



## ■引用・参考文献

### ■論文・図録・単行書等

- 今村 啓爾 1989 「群集貯蔵穴と打製石斧」『考古学と民族学 渡辺仁教授古希記念論文集』pp61-94 六興出版
- 加藤 晋平・小林 達雄・藤本 強 1990 「縄文文化の研究3 縄文土器Ⅰ」 雄山閣出版
- 加藤 晋平・小林 達雄・藤本 強 1988 「縄文文化の研究4 縄文土器Ⅱ」 雄山閣出版
- 加藤 晋平・小林 達雄・藤本 強 1988 「縄文文化の研究9 縄文人の精神文化」 雄山閣出版
- 上條 信彦 2003 「第Ⅳ章第4節 出土石器群の研究」『熊久保遺跡第10次発掘調査報告書-松本西山山麓における縄文時代中期の集落址-』 朝日村教育委員会
- 川崎 保 2004 「縄文時代の軟玉(ネフライト)製品の起源と展開(予察)」『玉文化』創刊号 日本玉文化研究会
- 桐原 健 1988 「縄文のムラと習俗」 雄山閣出版
- 後藤 信祐 1999 「遺物研究 石棒・石剣・石刀」『縄文時代』第10号 縄文時代文化研究会
- 小林 康男 1974・75 「縄文時代生産活動のあり方(一)・(三)・(四)」『信濃』26-12 pp59-69、27-4 pp25-42、27-5 pp73-85
- 小林 康男・宮下 健司 1988 「縄文時代の道具」『長野県史』考古資料編全1巻(4)遺構・遺物編 pp398-480 長野県史刊行会
- 鈴木 徳雄 2000 「縄紋後期浅鉢形土器の意義-器種と土器行為の変化-」『縄文時代』第11号 縄文時代文化研究会
- 関根 秀樹 2002 「縄文人になる!」縄文式生活技術教本 山と溪谷社
- 高橋 保・寺崎 祐助 1999 「第2章第2節縄文土器 第4項中期」『新潟県の考古学』新潟県考古学会
- 田口 勇・斎藤 努編 1995 「考古資料分析法」考古学ライブラリー-65 ニュー・サイエンス
- 寺内 隆夫 1991 「長野県上水内郡三木村・上赤塩遺跡出土の縄文中期土器について」『長野県考古学会誌』61・62号
- 寺内 隆夫 2002 「後沖式土器への系譜-千曲川流域における中期前葉(初頭)、斜行沈線文系の土器について-」『長野県の考古学Ⅱ』長野県埋蔵文化財センター研究論集Ⅱ 長野県埋蔵文化財センター
- 戸沢 光則編 1994 「縄文時代研究辞典」東京堂出版
- 戸沢 光則編 2002 「増補 縄文人の時代」新泉社
- 直良 信夫 1983 「釣針」ものと人間の文化史17 法政大学出版局
- 水野 清一・小林 行雄編 1988 『図解 考古学辞典』東京創元社
- 南 久和 1985 「北陸の縄文時代中期の幅年」他9編 転形書房
- 横浜市歴史博物館 2000 「発見! 巨大集落-大瀬仲町遺跡と縄文中期の世界-」(財)横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター
- 渡辺 誠 1984 「縄文時代の徳業」考古学叢書7 雄山閣出版

### ■県市町村誌史

- 生坂村誌編纂委員会 1997 『生坂村誌』歴史・民俗編 生坂村誌刊行会
- 麻績村誌編纂委員会 1989 『麻績村誌』上巻 自然編・歴史編
- 坂北村誌編纂会編集発行 1997 『村誌きかきた』下巻 歴史編・近現代編
- 十日町市史編さん委員会 1996 『十日町市史』資料編2 考古 十日町市役所
- 長野県史刊行会 1982 「Ⅱ-2縄文土器(8)資料版」『長野県史』考古資料編全1巻(4) 長野県史刊行会

## ■発掘調査報告書

- |                 |      |                                                                       |
|-----------------|------|-----------------------------------------------------------------------|
| 朝日村教育委員会        | 2003 | 「熊久保遺跡第10次発掘調査報告書－松本平西山麓における縄文時代中期の集落址－」                              |
| (財)いわき市教育文化事業団  | 2000 | 「郡遺跡・広畑B遺跡」いわき市埋蔵文化財調査報告第71冊 いわき市教育委員会                                |
| 群馬県安中市教育委員会     | 1998 | 「中野谷松原遺跡」安中横野平工業団地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書<br>安中市教育委員会                     |
| 棚畑遺跡調査団         | 1990 | 「棚畑－ハヶ岳西山麓における縄文時代中期の集落遺跡－」茅野市教育委員会                                   |
| 中津川教育委員会        | 1995 | 「阿曾田遺跡 発掘調査報告書」                                                       |
| (財)長野県埋蔵文化財センター | 1993 | 「北村遺跡」中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書11－明科町内－                                   |
| (財)長野県埋蔵文化財センター | 1993 | 「向六工遺跡・十二遺跡・野口遺跡・古司遺跡・子尾入遺跡」<br>中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書12－東筑摩郡坂北村・麻績村内－ |
| 長野県立歴史館         | 2003 | 「SOSふるさとの文化財をすくえ－伝えたい古人の心と技－」<br>平成15年度夏季企画展図録 長野県立歴史館                |
| 新潟県教育委員会        | 1992 | 「関越自動車道関係発掘調査報告書－五丁歩遺跡・十二木遺跡－」<br>新潟県埋蔵文化財調査報告書 第57集                  |
| 山形村教育委員会        | 2002 | 「三夜塚遺跡Ⅲ」山形村遺跡発掘調査報告書 第12集                                             |
| 御代田町教育委員会       | 1992 | 「塩野西遺跡群発掘調査概要報告書」                                                     |
| 御代田町教育委員会       | 1997 | 「川原田遺跡－縄文編－長野県北佐久郡御代田町川原田遺跡発掘調査報告書」                                   |
| 御代田町教育委員会       | 1997 | 「塩野西遺跡群 滝沢遺跡」長野県北佐久郡御代田町滝沢遺跡発掘調査報告書                                   |



236 発掘作業参加者



237 整理作業参加者



## ■ 図版目録

- 記載の順序は、図版番号、図版の名称/所蔵者(保管者)/写真提供者/出典等/撮影地点名・遺物No.とした。
- 所蔵者と写真提供者が同じ場合には、提供者としてまとめた。
- 特に記載のない写真・図版については、坂北村教育委員会の撮影・作成による。

### 第1章 遺跡の位置

- 1 遺跡上空から浅間山を望む/坂北村
- 2 日本列島の中の東畑遺跡
- 3 信濃川の支流、麻績川
- 4 坂北村全国/坂北村全国を使用、一部改変
- 5 遺跡周辺の地形と麻績川/坂北村蔵
- 6 台地上に展開する縄文時代の村々/坂北村都市計画図5 (S=1:2500)を使用
- 7 遺跡手前で大きく蛇行する麻績川
- 8 明治20年頃に測量された切図/坂北村保管 /デジタル編集済
- 9 遺跡下の地質
- 10 近くの別所川右岸にみえる褶曲の様子 /村誌さかきた上巻p.48一部改変
- 11 遺跡下を流れる麻績川
- 12 四阿屋山麓のミズナラ林/提供中村英夫氏
- 13 四阿屋山麓の萩/提供中村英夫氏
- 14 犀川右岸の生坂村東部八幡原遺跡の土器 /坂北村教育委員会撮影/生坂村教育委員会
- 15 東部八幡原遺跡の砥石/坂北村教育委員会撮影 /生坂村教育委員会
- 16 向六工遺跡/長野県立歴史館
- 17 東条川左岸の本城村南遺跡の土器 /坂北村教育委員会撮影/本城村東条伝承施設
- 18 麻績川右岸の麻績村下井堀遺跡の土器 /坂北村教育委員会撮影/渡辺芳晴氏
- 40 炉の跡/SB057
- 41 建物の跡/S T01
- 42 大きな穴/SK043
- 43 石が投げ込まれた穴/SK137・SK138
- 44 遺構の断面/SB045
- 45 土器の実測図/P001
- 46 土器の実測図/S2112
- 47 遺物の出土状況/SB053
- 48 復元された土器/P544
- 49 出土した土器/SB053出土
- 50 アクセサリー類/上:S3546 下:S3547
- 51 堆積の状況/SI029
- 52 上の住居の状況/SB029A
- 53 出土した土器/SB029出土
- 54 出土した土器/SB029出土
- 55 上の住居の状況/SB028A
- 56 上の住居の炉/SB028A
- 57 下の住居の状況/SB028B
- 58 出土した土器/SB28B出土
- 59 炉の状況/SB045 P010
- 60 炉体土器/P010
- 61 炉と土器/左:P001 右:P010
- 62 土器の出土状況/SB045
- 63 住居跡の完備状況/SB045
- 64 出土した動物の骨/SB045出土
- 65 深鉢形土器/P012
- 66 浅鉢形土器/P014
- 67 出土した土器/SB045出土
- 68 石皿炉/SB095
- 69 遺物の出土状況/SB095
- 70 再会した土器/P020
- 71 遺構間接合の状況/P020・P153
- 72 出土した土器/SB095出土
- 73 家族のだんらん/イラスト横沢見氏
- 74 柱穴を探す/SB095
- 75 柱穴の調査/SB095
- 76 家の解体(柱を抜く)/イラスト横沢見氏
- 77 柱穴に土器を納める/イラスト横沢見氏
- 78 土器の出土状況(ピット6)/P002
- 79 家を覆う土と遺物の状態/SB095
- 80 廃屋へ土器を投げ込む/イラスト横沢見氏
- 81 炉と埋薬/SB004
- 82 埋薬上の石蓋/SB004
- 83 石蓋を取り除いた状態/SB004
- 84 埋薬の状況/SB004(上:P003 下:P004)
- 85 埋薬の取り上げ/SB004
- 86 埋薬と石蓋/SB004(左:P004 右:P003)
- 87 埋薬に入れられた土器/SB011埋薬P006内出土
- 88 埋薬の出土状況/P006
- 89 埋薬/P006

### 第2章 集落のくらし

- 19 遺跡に堆積した土
- 20 微地形と土層の堆積状況
- 21 東畑遺跡の地層模式図
- 22 重機による表土剥ぎ
- 23 遺構や遺物をみつける。
- 24 丹念に遺構を探す。/SB008・SB009
- 25 平らな石はなんだろう。/SB011
- 26 どこまで石はあるかな。/SB011
- 27 土をはがしていく。/SB011
- 28 敷石住居っていうんだ。/SB011
- 29 火を焚いた跡。/SB011
- 30 土器が埋まっていた。/SB011
- 31 記録をする。/SK069
- 32 遺構の敷
- 33 竪穴住居跡/SB005
- 34 竪穴住居跡/SB075・SB076
- 35 火を焚いた跡/SB005
- 36 石を組んだ炉/SB075
- 37 敷石住居跡(縄文時代後期初頭)/SB011
- 38 炉の跡/SB011
- 39 敷石住居跡(縄文時代後期前葉)/SB057

- 90 散石の検出状況/SB011  
 91 散石の石材/SB011  
 92 住居の様子/SB011  
 93 小形の土器/P259  
 94 大きくて深い穴 (SK021) /SK021  
 95 鉢が出土した穴 (SK178) /SK178 (P536出土)  
 96 深鉢が出土した穴 (SK177) /SK177 (P539出土)  
 97 穴の調査 (SK069) /SK069 (P577出土)  
 98 SK069の土器/P577  
 99 出土した土器/左:P532 右:P533  
 100 SK176の完備状態/SK176  
 101 葬送の様子/イラスト横見氏  
 102 SK176と出土土器実測図/P532  
 103 明科町北村遺跡の埋葬人骨 (SH1215) /長野県立歴史館蔵  
 104 焼成粘土塊/P134  
 105 土器の出土状態/SB61(P083)  
 106 土器の接合作業/P083  
 107 復元された土器/P083  
 108 縄文時代中期中葉の土器  
 109 釣手形土器/P378  
 110 釣手形土器実測図/P378  
 111 浅鉢形土器/P561  
 112 台付土器/P316  
 113 台付土器実測図/P316  
 114 鉢形土器/P008  
 115 鉢形土器実測図/P008  
 116 注口土器実測図/P286・P571  
 117 注口土器/P286・P571ほか  
 118 前期後葉の土器/P005  
 119 中期初葉の土器/P041  
 120 中期中葉の土器/P048  
 121 中期中葉の土器/P076  
 122 中期中葉の土器/P070  
 123 中期中葉の土器/P019  
 124 中期中葉の土器/P236  
 125 中期後葉の土器/P458  
 126 中期後葉の土器/P434  
 127 中期後葉の土器/P457  
 128 全体写真/P069  
 129 出土状況 (SB061住居跡) /SB061  
 130 円文の状況/P069  
 131 赤色塗彩(外部) /P069  
 132 赤色塗彩(内部) /P069  
 133 実測図/P069  
 134 展開写真/P069  
 135 付着物のある土器/P075  
 136 長野市榎田遺跡の土器/長野市史  
 /長野市埋蔵文化財センター
- 137 中期中葉の土器 (SB045出土) /P012  
 138 中期中葉の土器 (SB045出土) /P009  
 139 中期中葉の土器 (SB045出土) /P001  
 140 中期中葉の土器 (SB012出土) /P303  
 141 中期中葉の土器 (SB005・095出土) /P020  
 142 中期中葉の土器 (SB095出土) /P021  
 143 中期中葉の土器 (SB095出土) /P002
- 144 中期中葉の土器 (SB065出土) /P433  
 145 中期後葉の土器 (SB004埋蓋) /P003  
 146 後期初葉の土器 (SB011埋蓋) /P006  
 147 深鉢の胴部 (P0005) /P005  
 148 深鉢の口縁部 (P1631) /P1631  
 149 深鉢の口縁部 (P0338) /P388  
 150 深鉢の胴部 (P0001) /P001  
 151 深鉢の胴部 (P0013) /P013  
 152 深鉢の胴部 (P0303) /P303  
 153 鉢の胴部 (P0020) /P020  
 154 深鉢の胴部 (P0433) /P433  
 155 釣手土器の口縁部 (P0378) /P378  
 156 深鉢の胴部 (P0004) /P004  
 157 深鉢の胴部 (P0434) /P434  
 158 深鉢の胴部 (P0006) /P006  
 159 鉢の胴部 (P0572) /P572  
 160 深鉢の底部 (P0108) /P108  
 161 深鉢の胴部 (P0285) /P285  
 162 鉢の底部 (P0578) /P578  
 163 縄文時代中期中葉の土器  
 164 縄文時代中期後葉~後期前葉の土器  
 165 測定前の試料処理/提供小林謙一氏  
 166 測定した土器/P002  
 167 付着炭化物(土器の内側)/提供小林謙一氏  
 168 付着炭化物の拡大写真/提供小林謙一氏
- p.47第1表 東畑遺跡出土縄文土器の胎土分析結果 (w t %)  
 /建石徹氏作成
- p.47第1圖 東畑遺跡出土縄文土器の胎土分析結果 (Si・Fe)  
 /建石徹氏作成
- 169 石鏃(矢じり)  
 170 石鏃(フリル)  
 171 三脚石器と石匙(ナイフ)  
 172 色とりどりの石器  
 173 釣針形石器と石鏃(石のおもり)  
 174 水晶の石器  
 175 黒曜石の原石と石核  
 176 その他の石核  
 177 定角式の磨製石斧  
 178 乳棒状の磨製石斧  
 179 打製石斧  
 180 石皿と磨石・磨石/石皿:S3360 石皿上の磨石:S3362  
 F:S3364
- 181 石器器種構成からみた時期別の生業/伊比博和作成  
 182 焼けていない骨/3412-1  
 183 解体直のある骨片/3244-2  
 184 SB045号住居跡出土の骨片/SB045出土  
 185 同定された骨の種別比  
 186 シカの角/SB097出土  
 187 小動物の骨  
 188 釣針形石器/S3556  
 189 石器の表面/提供(株)アルカ  
 190 石器の先端/提供(株)アルカ  
 191 石器の表面/提供(株)アルカ  
 192 石槍/S3588/撮影(株)アルカ/坂北村  
 193 折れ面の緑の磨石/提供(株)アルカ

- 194 槍の折れ面 / 提供(株)アルカ  
 195 定角式磨製石斧 / S0043 / 撮影(株)アルカ / 坂北村  
 196 石斧のb面側の刃の拡大 / 提供(株)アルカ  
 197 石斧の刃の先端の磨耗 / 提供(株)アルカ  
 198 磨製石斧復元図 / 提供(株)アルカ  
 199 動物の顔がついた土器 / 獸面把手集合  
 200 土偶の頭部 / P1506  
 201 土偶の集合  
 202 赤く塗られた土偶 / P1597  
 203 土偶の内部 / P1596・P1597・P1601・P1602  
 204 土偶のX線写真 / 撮影長野県立歴史館  
 205 出土した石棒 / 左上: S3247・右下: S3309  
 右上: S3288・右下: S3289  
 206 石棒の実測図 / S3247・S3309・S3289・S3288  
 207 丸石 / 左: S3425・中: S3403・右: 袋Na.1502  
 208 SK018石棒出土状況 / SK018 S3288出土  
 209 アクセサリー類 / 石器玉類集合  
 210 生坂村東部八幡原遺跡のアクセサリー  
 / 坂北村教育委員会撮影 / 生坂村教育委員会  
 211 アクセサリーの実測図  
 212 砥石 / 左: S3626・上: S3357・右: S3359  
 213 杖状耳飾の装着例 / イラスト横沢見氏  
 214 東郷ムラの秋の風景 / イラスト横沢見氏
- 第3章 周辺地域との交流**  
 215 各地の縄文ムラに使われた土器  
 / 『棚田』、『五丁参道跡』、『川原田遺跡』より引用、一部改変  
 216 西日本の土器(北白川下層式土器) / P551  
 217 千曲川上流の土器 / P567  
 218 東北地方の土器(楯取式土器)  
 / 左: P284, 中: P182, 右: P285  
 219 東郷の土器と福島県の土器  
 / 『郡遺跡・広畑B遺跡』より転載  
 220 平玉(純紋岩) / S3599 分析: 長野県立博物館  
 221 平玉(緑泥石岩) / S3624 分析: 長野県立歴史館  
 222 鹿角(透閃石岩) / S3557 分析: 長野県立歴史館  
 223 磨製石斧(透閃石岩) / S2327 分析: 長野県立歴史館  
 224 さまざまな石材で作られた磨製石斧 / 磨製石斧集合  
 225 釣針形石器の出土した主な遺跡  
 / 『縄文のムラと習俗』、『阿曾田遺跡』、『十日町市史』より引用  
 226 東郷遺跡の土器を手にとって説明される寺崎氏

#### 第4章 集落の移り変わり

- p64 長野県の土器の移り変わり  
 / 『長野県史』、『村誌さかきた』より引用  
 227 SK009土器出土状況 / P1002  
 228 灰輪陶器 小形版 / P580  
 229 春積川と東郷遺跡  
 230 遺跡の全景

#### 第5章 調査の記録

- 231 は場整備事業範囲と試掘調査  
 232 調査開始式  
 233 重機による表土剥ぎ

- 234 地権者の皆さんへの説明  
 235 委託測量の様子  
 236 調査補助員による測量  
 237 村議会の視察  
 238 遺跡を保護する土  
 239 記録保存と盛土保存の範囲  
 240 砂を保護する  
 241 盛土保護工事の開始  
 242 保護用盛土を敷き詰める  
 243 保護工事の様子  
 244 遺物の洗浄作業  
 245 土器の仕分け  
 246 土器片を並べる  
 247 土器を組み立てる  
 248 土器の接着復元  
 249 土器の補強復元  
 250 土器の展開写真撮影  
 251 コンピュータへの入力

#### 第6章 これからの東郷遺跡

- 252 小学生の調査体験  
 253 土器洗いの体験  
 254 秋晴れの見学会  
 255 実際に見ると面白い  
 256 見学会ポスター  
 257 縄文時代ってどんな時代かな  
 258 東京湾の遺跡と比べると  
 259 自分の住む村の歴史  
 260 縄文の芸術に挑戦する  
 261 アンゲン編み  
 262 透視図の準備風景  
 263 土器の展示風景  
 264 文化祭当日の館内  
 265 アクセサリー作り  
 266 触るとわかってくる  
 267 透視図のポスター  
 268 土器の収納  
 269 土器の登録カード  
 270 遺物収納箱  
 271 事業終了後の現地  
 272 平成16年秋  
 273 東郷通信第2号(平成16年7月発行) / 『館報さかきた』  
 第201号掲載  
 274 第2号(平成16年9月発行) / 同上 第202号  
 275 第3号(平成16年12月発行) / 同上 第203号  
 276 第4号(平成17年2月発行) / 同上 第204号  
 277 坂北村歴史民俗資料館



あ行

青柳の切通し あおやぎのきりどおし

善光寺街道を青柳宿から麻績村に向かう経路にある大切通しと小切通し。現在は車道にもなっている。大切り通しは高さ6m。天正八(1580)年、青柳伊勢守領長が切り開き、のちに三回にわたって普請が行われた。大岩を人がノミを使って切り開いたもので、今でも岩盤にノミで削ったあとを見ることができる。また江戸時代以降に置かれた小さな石仏とあいまって、当時の旅路を思い描かせる。

遺構間接合 いこうかんせつごう

異なる遺構から出土した遺物片同士が接合すること。このことから縄文人の使用後の土器の扱い方や住居の廃絶行為などが推測される。

石槍 いしやり

槍の先につける石器。尖頭器(せんとうき)ともいう。縄文時代初頭には主要な狩猟具の一つとして発達したが、石鏃の盛行によって数が激減していく。

エネルギー分散型X線分光装置(EDS)

えねるぎーぶんさんさんがたえつくすせんぶんこうそうち  
設置場所:長野県立歴史館保存処理室など  
特質:装置内に入る資料(10×10×5cm位)であれば、石器自体を壊すことなく分析できる(非破壊分析)。原理:真空中で試料面(石器など)に電子線を照射し、発生する特性X線をエネルギー分散型の分光器で分け、元素の定性定量分析をする。その結果をマッピング分析によって二次元表示(チャート)する。備考:得られたチャート図と実物を対照して鑑定することで、より正確な石材名を導きだせる。

塩基性片岩 えんきせいへんがん

広域変成作用でできた変成岩。再結晶し、片理がある。平行に薄く割れやすい。

麻績御厨 おみのみくりや

伊勢神宮内宮の供御(くご)・供祭用の魚分類・果物類を調進するために設けられた所領(領地)。麻績の神明宮は、麻績御厨の惣社として平安末期に創建されたといわれている。本殿は内宮式神明造り、拝殿、仮殿、神楽殿、舞台の5棟が重文指定され、境内には県天然記念物の千年杉が立っている。

か行

加曾利E式 かそりーいしき

縄文中期後半の関東地方を中心として分布する土器型式。1924年の調査で出土した千葉県加曾利E地点の土器群が標

式資料として型式設定された。

膝坂式 かつきかさしき

西関東・中部地方を中心として分布する縄文中期中葉の土器型式。1928年の調査による神奈川県相模原市膝坂遺跡出土土器の一部を標式資料として型式設定した。

唐草文土器 からくさもんじき

中期後葉の土器型式。唐草文を特徴とし、長野県諏訪盆地から松本平・伊那谷にかけて分布する。

クラスター分析 くらすたーぶんせき

多変量解析(観測値が複数の値からなるデータを統計的に扱う手法)の一つ。データがある基準に基づいて集団に分けて解析する。

蛍光X線分析 けいこうえつくすせんぶんせき

試料面に真空状態でX線を照射し、試料面から特性X線(蛍光X線)が発生する。このX線を波長分光型の分光器で分け、元素の高精度の多元素同時定量分析を実施する方法。非破壊分析である。

原生林 げんせいりん

伐採などの人手が一度も加えられていない自然のままの森林。原始林。

混和材 こんわじ

土器を作るときに混ぜる川砂や植物繊維などの総称。土器を乾燥して、焼くときに亀裂が入らないようにするつなぎの役割がある。時期や地域によって混和材も変化している。

さ行

砂岩 さがん

堆積岩の一種。砂粒が水中に沈殿固結したもの。礫石の材料となる。

自然植生 じぜんしょくせい

人間の影響を受けずに自然のままに生育する植生。特に人間が植生に影響を及ぼす以前の自然の植生を原植生という。

蛇紋岩 じゃもんがん

滑らかで緑または黒色の脂肪色。模様美しく、装飾石材となる。

褶曲 しゅうきよく

地殻にはたらく力によって地層が波状に押し曲げられること。また、その状態。

人工林 じんこうりん

人工造林や天然更新を利用して人間が仕立てた林地。

石刃 せきじん

石器時代に特徴的な石器の素材となる剥片。

石棒 せきぼう

長い棒状の磨製石器。一端または両端が男根状に整形されたもの、円棒のままのものがある。祭祀用具と考えられている。

搔器 そうき

素材となる剥片の下端部に急角度に調整された片刃の刃部をもつ石器。用途としては、木の皮を削り取る、皮をなめすなどが考えられる。

雑木林 ぞうきばやし

種々の雑木が混じって生えている林。二次林のひとつ。薪炭林、低林ともいう。クスギ、コナラ、シデ類が主で種々の低木が混生する。薪や木炭などの原料とする。20～30年程の周期で伐採する。

曾利式 そりしき

縄文時代中期後半の土器型式。長野県八ヶ岳南西麓、曾利遺跡で1960年におこなわれた調査で出土した大量の土器群により設定された。

た行

第三紀層 だいさんきそう

約7千万年前～一百万年前までの第三期に生じた地層。哺乳動物、双子葉植物が栄えた。日本列島はこの時代にできた。

大珠 たいしゅ

5cm以上の塊形をした長楕円形で、その中央よりやや片側によった部分に穿孔されているのが一般的。ヒスイ製のものは硬玉製大珠という。出土はまれで、一遺跡1点にとどまるのが普通であり、貴重な装身具であったとされる。

代償植生 だいしょうしょくせい

人間の影響によって立地本来の自然植生がさまざまな人為植生に置き換わったもの。

胎土 たいど

土器や陶磁器の素地(きじ)となる土。

礫石 たたきいし

自然の石を道具として利用したもの。石器や骨角器の作成に用いたり、食物の加工調理に用いたりする。

堅穴住居跡 たてあなじゅうきょあと

たてに掘りくぼめた床をもつ構造の住居跡。縄文時代の代表的な住居跡である。

チャート チャート

きめが細かく、極めて固い。光沢があり、褐色またはうすぐろい。ガラス質で石炭などの石器に適している。

泥岩 でいがん

堆積岩の一種。泥土が固結硬化したもので、頁岩のように層状をなさないもの。

天然林 てんねんりん

造林や育林に関し、ほとんど人手が加わっていない森林。特に、原生林を意味することもある。

砥石 といし

自然礫や石皿の破損品が用いられた。縄文時代では石器、骨角器、木器の整形・研磨に盛んに使われた。

トレンチ調査 とれんちちようさ

トレンチ(みぞ)を計画的に設定して、掘削したトレンチの側面や底面の様子を調べて、土層の堆積状況やまだ掘っていない部分の様相をとらえる調査法。地質調査、埋蔵文化財の試掘調査や個別遺構の形状確認に用いることが多い。

は行

貼り床 はりゆか

荒掘りをおこなった後に、土を埋めて踏み固めて平らにした住居の床。

や行

焼町土器 やけまちどき

縄文中期中葉に長野県北半、群馬県北西部、新潟県、一部福島県にかけて、限られた分布と独特な特徴を示して存在する土器。縄文の使用は見られない。塩尻市の焼町遺跡で住居跡の一括出土資料が得られたことで、焼町土器として研究・検討が進められるようになった。

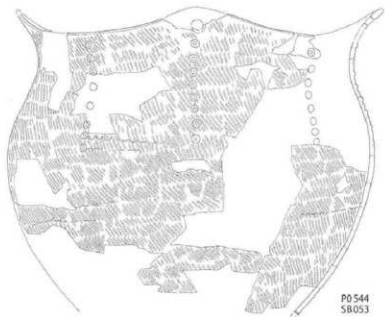
溶脱 ようだつ

土壌の構成物質が、ある層から溶け出して除去される過程。

ら行

礫岩 れきがん

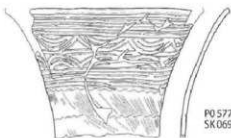
堆積岩の一。礫が砂質・泥質・石灰質などの基質によってくっつき、固められてきた岩石。



P0544  
SB053



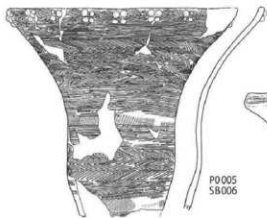
P0536  
SK178



P0577  
SK069



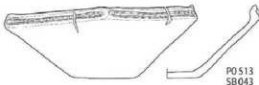
P0010  
SB045



P0005  
SB006



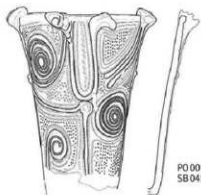
P0041  
SB090



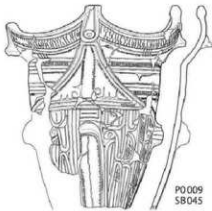
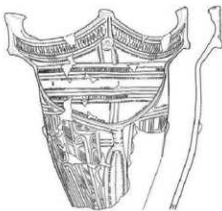
P0513  
SB043



P0012  
SB045



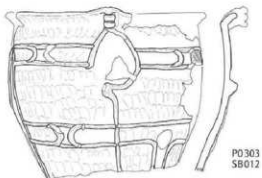
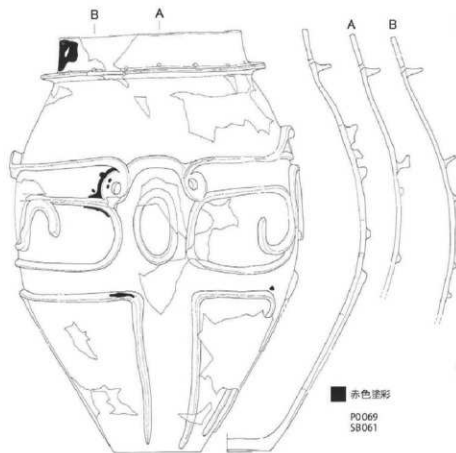
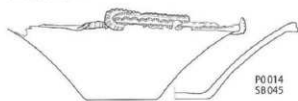
P0001  
SB045



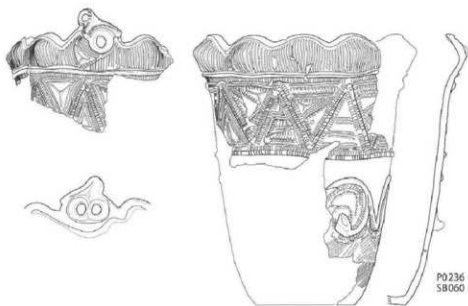
P0009  
SB045

0 (1:6) 20cm

实测图版



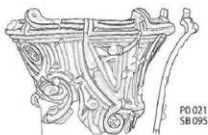
0 (1:6) 20cm



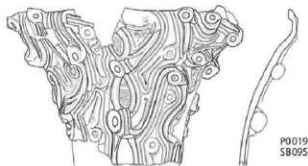
P0236  
SB060



P0020  
SB095



P0021  
SB095



P0019  
SB095



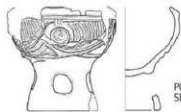
P0002  
SB095



P0433  
SB065



P0316  
M-23  
(附原物照)

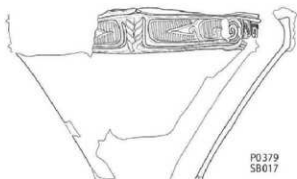
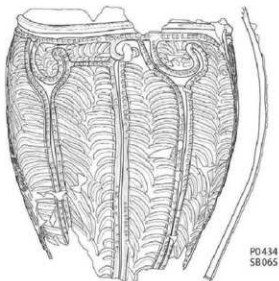
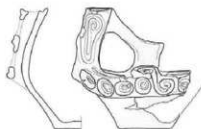
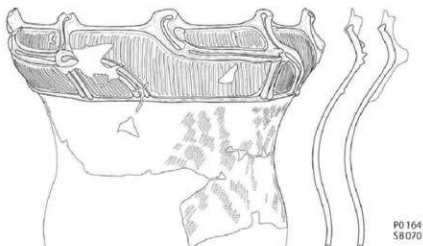
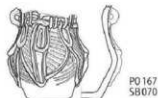


P0023  
SB095

0 (1:6) 20cm

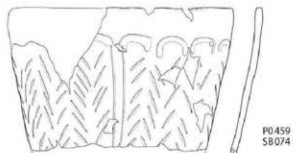
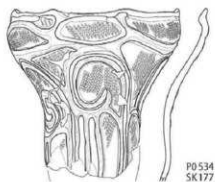
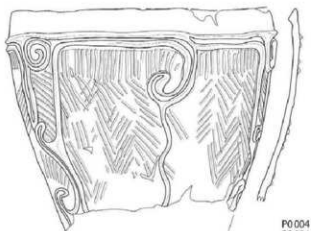
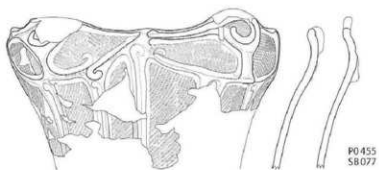


実測図版



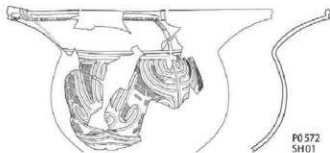
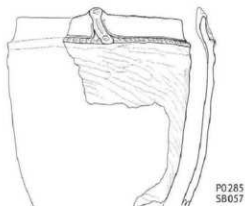
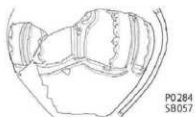
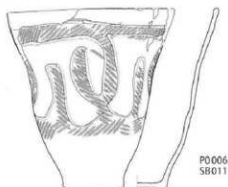
0 (1:6) 20cm

実測図版



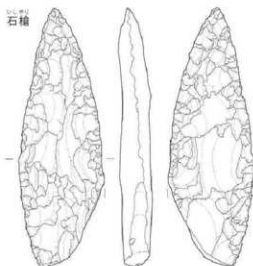
0 (1:6) 20cm

実測図版

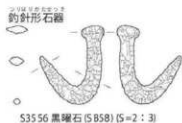


0 (1:6) 20cm

実測図版



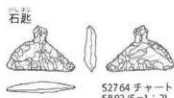
S3588 珪質頁岩  
水田 170  
(S=2 : 3)



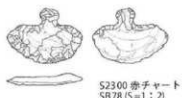
S3556 黒曜石 (S 858) (S=2 : 3)



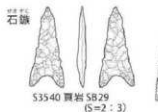
S2307 頁岩  
SB7R (S=2 : 3)



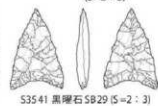
S2764 チャート  
SB92 (S=1 : 2)



S2300 赤チャート  
SB78 (S=1 : 2)



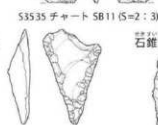
S3540 頁岩 SB29  
(S=2 : 3)



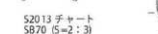
S3541 黒曜石 SB29 (S=2 : 3)



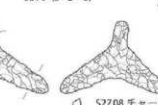
石槍未製品



S3535 チャート SB11 (S=2 : 3)



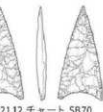
S2013 チャート  
SB70 (S=2 : 3)



S2708 チャート  
SB91 (S=2 : 3)



S3323  
ホルンフェルス  
SB79 (S=1 : 2)



S2112 チャート SB70  
(S=2 : 3)



S1011 黒曜石 SB70  
(S=2 : 3)



石槍未製品



石槍



S2083 頁岩  
SB70 (S=2 : 3)



S1739 頁岩  
SB61 (S=1 : 2)



S890 黒曜石 SB70  
(S=2 : 3)



S3554 赤チャート  
SB70 (S=2 : 3)



S3539 黒曜石 SB29  
(S=2 : 3)



S3537 頁岩 SB11  
(S=2 : 3)



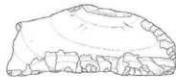
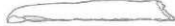
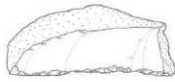
S3550 頁岩  
SB39 (S=1 : 2)

実測図版

横刃



S2065  
砂岩  
SB70  
(S=1:2)



S1362  
ホルンフェルス  
SB54  
(S=1:2)

播磨



S1257  
ホルンフェルス  
SB48  
(S=1:2)

打製石斧

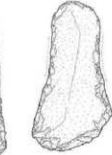


S0541  
ホルンフェルス  
SB13  
(S=1:3)

打製石斧



S0979  
ホルンフェルス  
SB42  
(S=1:3)



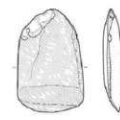
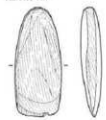
S1496  
頁岩  
SB57  
(S=1:3)

磨製石斧

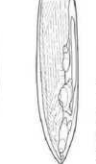


S3569  
能成岩  
SB138  
(S=1:2)

磨製石斧



S0365  
透閃石岩  
SB11  
(S=1:2)



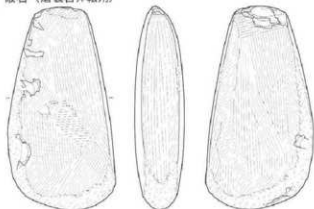
S2327  
透閃石岩  
SB79  
(S=1:2)



S3563  
透閃石岩  
SB92  
(S=1:2)

実測図版

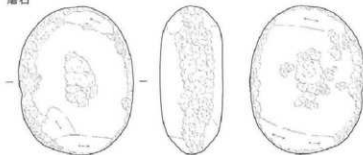
磨石 (磨製石斧転用)



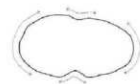
S11  
透閃石岩  
SB1  
(S=1:2)



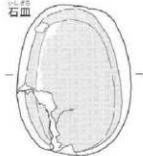
磨石



S3347  
安山岩  
SB61  
(S=1:3)



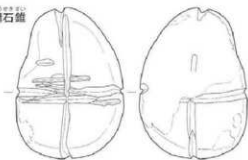
石皿



S3418  
安山岩  
SK137  
(S=1:6)



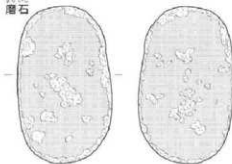
有溝石皿



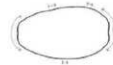
S3622  
砂岩  
SK67  
(S=1:2)



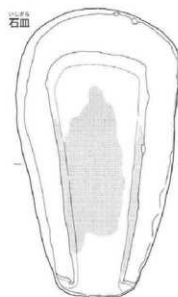
磨石



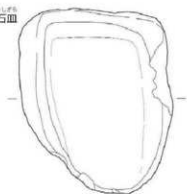
S3251  
花崗岩  
SB45  
(S=1:3)



石皿



石皿



S3416  
安山岩  
SK163  
(S=1:6)



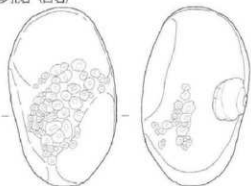
S3360  
砂岩  
SB89  
(S=1:6)



磨耗痕

実測図版

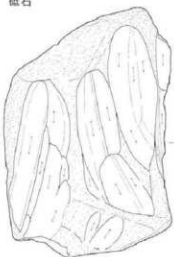
多孔石 (凹石)



S3276  
砂岩  
SB65  
(S=1:6)



磁石



S3345  
砂岩  
SB61  
(S=1:6)



磁石・石皿



S3299  
砂岩  
SB68  
(S=1:6)



碗形石製品



■ 附着物

S3498  
安山岩  
表面採集  
(S=1:3)



磁石



S3626  
砂岩  
SB92  
(S=1:6)



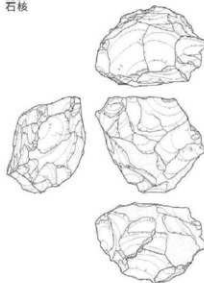
磁石



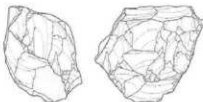
S3359  
砂岩  
SB89  
(S=1:6)



石核



S3395  
頁岩  
SH1  
(S=1:4)



实测图版

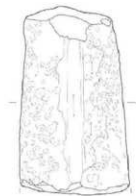
石楯



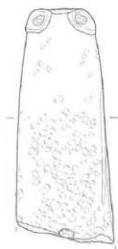
S3289  
砂岩  
地点不明  
(S=1 : 6)



S3309  
砂岩  
SB70  
(S=1 : 6)



S3247  
砂岩  
SB16  
(S=1 : 6)



S3288  
砂岩  
SK18  
(S=1 : 6)

丸石 (台石)



S3425  
砂岩  
SK272  
(S=1 : 6)

0 (1:6) 20cm



実測図版

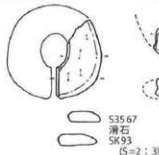
塊状耳飾



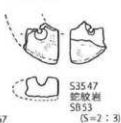
塊状耳飾



塊状耳飾



塊状耳飾



二次加工品



管玉



管玉



平玉



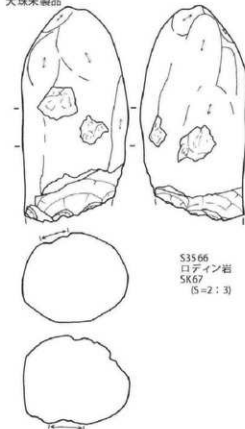
平玉



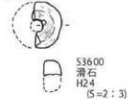
平玉



大珠未製品



丸玉



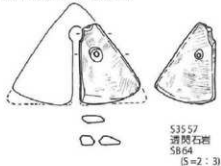
丸玉



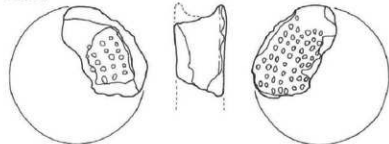
環状石製品 (指輪?)



垂飾 (塊状耳飾の二次加工)



土製耳飾



## ■坂北村の歴史

時代	西暦	和暦	ことごと
旧石器	BC3000		野尻湖周辺にナウマンゾウを狩猟する人々の生活が始まる。 <b>東山遺跡(110)</b> で後期の石刃技術にもとづき石片が使用される。
			<b>東山遺跡</b> で、大形石石器の種子型変形石片が使用される。
縄文	13000		このころ日本が大陸から離れて列島化し、多量化が始まる。土器や弓矢が使用されて、縄文文化が始まる。
	7000		<b>穴六工遺跡(41)</b> で、 <b>埴川群瓦土器</b> が使用された。
弥生	550		<b>穴六工遺跡</b> で小形土器が出土され、早期米の稲作文化土器が使用される。また石器の材料の黒曜石は下野郡湯ヶ峰、和田村和田原からたらされる。坂北村 <b>十二遺跡(2)</b> からも黒曜石土器が出土する。
	400	今から6000年前	<b>東峰遺跡</b> に縄文前期末の人々が生活する。
古墳	300	今から2000年前	新羅川の段丘上に、中期の <b>東部・高塚岡(42)</b> ・ <b>高平遺跡(40)</b> が築かれ、狩猟・漁労・採集の生活をおこなう。 <b>清長寺遺跡(38)</b> や <b>東山遺跡</b> は、より高所に営まれた。
	AD300		<b>穴六工遺跡</b> で、弥生時代後期の土器が使用される。
飛鳥	400		吉業山遺跡で東北の空を通過し、坂井村には渡来船の船い、 <b>高野村</b> 軍塚古墳が造られる。
	500		河谷沢地帯に、後期の横穴石室をもつ <b>武士塚古墳(28)</b> ・ <b>北山古墳(26)</b> が造られ、山の上から河の河口と乗馬が行われていたことがわかる。
奈良	563	推古1	聖徳太子が逝く。
	645	大化1	大化の改新が行われる。
平安	646	大化2	安曇郡麻績郷が成立し、麻績の郷が現麻績村鎮中中学校付近におかれる。
	701	大化7	今高塚山遺跡とその支道が整備され、支道が東北を通過する。
奈良	710	和銅3	平城京に遷都する。
	715	和銅4	里を削り改め、里を2-3の層に分割する。この時、麻績の郷ができる。
平安	819	養和2	香積寺・麻績村御供所が創設されたと伝えられる。
	1179	治承3	<b>東峰遺跡</b> に再び人が住む。 <b>穴六工遺跡</b> で、10世紀の築穴瓦垣がつかられ、小園池をおこなう。 新築地に鹿島流きの <sup>（川）</sup> が造られ、修験道場として利用され始める。 河谷沢に <b>長巻原経塚(31)</b> がつかわれ、菅白合子、木履、御形などが埋納される。
鎌倉	1241	寛永2	河谷沢の高塚地帯に、八幡院(徳兵衛 <sup>（川）</sup> 塚)が埋納される。
	1249	建永1	徳永寺の本堂 <b>阿弥陀如来坐像(C)</b> 、大願菩薩堂、大仏師永実によりなる。
南北朝	1339	延元(暦保2)	徳永寺の本堂 <b>阿弥陀如来坐像</b> を修理する。
	1399	応永5	徳永寺住持天住、河谷の <b>阿弥陀如来像</b> を修理する。
戦国	1553	天文22	信玄、 <b>青柳城(8)</b> に寄陣し、21日まで在陣する。(17武田義興(信繁青柳城)の修理をする。
安土・徳山	1582	天正10	小笠原貞康、 <b>青柳城</b> を高城の形改めると、城工青柳某は越後に逃れる。聞いて貞康、麻績城を改めるが、上杉軍の侵襲のために大敗する。青柳の残党これを攻撃する。
	1589	天正17	岩倉寺本堂、山崩れのため焼損。八木常高守再建する。
江戸	1634	寛永11	河谷沢神明宮再興される。この年別正体(懸仏)三体消失する。徳永寺住持安國、別正体を再興する。
	1660	元禄3	河谷沢神明宮の本堂、再建される。(棟、和代親家数内井上伊兵衛)
寛政	1765	宝暦5	岩倉寺焼失する(高座まで7年かかると、仁藤村大日堂、河谷沢神明宮の門が完成する。
	1782	宝暦12	仁藤村大日堂再建される。
天明	1783	天明3	徳永寺本堂が竣工する(棟、立川和四郎)。
	1813	享和10	徳永寺の本堂・庫裏焼失する。
明治	1820	文政3	徳永寺本堂再建される。
	1825	明和8	徳永村となる。
明治	1901	明治34	坂北村長徳行會完成する。
	1927	昭和2	坂北製茶業開始する。
昭和	1950	昭和25	岩倉寺別正体(懸仏)重要文化財の指定を受ける。
	1965	昭和40	<b>崖切塚(F)</b> 、県立公園に指定される。
昭和	1974	昭和49	徳永寺の本堂 <b>阿弥陀如来坐像</b> が県史に指定される。
	1974	昭和49	<b>青柳城跡</b> 及び <b>懸仏</b> が県史跡に指定される。
平成	1984	昭和59	<b>東山</b> で石器を発見。坂北村の歴史1万数千年前から判断される。
	2004	平成16-2	長野自動車道建設に伴い <b>穴六工遺跡</b> が調査される。
平成	2003	平成15	中山総合整備事業に伴い <b>東峰遺跡</b> が調査される。
	2005	平成17	「東峰遺跡」調査報告書が刊行。資料が村歴史民俗資料館に保管される。

表中のアルファベット記号は「文化財マップ」と対応しています。ご覧ください。





## ■調査体制／執筆分担

### ◆調査体制

#### ○坂北村教育委員会 事務局

教育長 鬼熊一志  
(平成15年4月～平成15年9月)

教育長 柳沢 毅  
(平成15年10月～)

調査担当 教育次長 待井安登  
(平成15年4月～平成15年9月)

調査担当 教育次長 太田巨之  
(平成15年10月～)

臨時職員 吉池祐一  
(平成15年4月～平成16年3月)

臨時職員 藤田智紀  
(平成16年4月～平成17年3月)

#### ○技術指導

財団法人長野県文化振興事業団

長野県埋蔵文化財センター調査部

調査研究員 柳澤 亮 (平成15・16年度)

○調査・整理参加者 123ページ参照

### ◆業務協力 明治大学黒耀石研究センター

### ◆測量業務 (委託) (有) サンコンサルタツツ

### ◆重機・現場保安管理 中信建設株式会社

### ◆分析鑑定協力

竹の鑑定 茂原信生  
(京都大学豊長顕研研究所 所長)

石材の鑑定 宮島 宏  
(糸魚川フォッサマグナミュージアム)

石材の鑑定 原山 智 (信州大学理学部 教授)

X線透過写真撮影 水沢教子 (長野県立歴史館)

X線分光分析 同上

### ◆報告書刊行にかかる業務分担 (整理補助員含む)

事業の統括・事務 太田・勝田

整理業務の統括 柳澤

報告書作成支援業務 (委託)

株式会社シン技術コンサル

#### (個別業務)

遺構図のデジタル化 シン技術コンサル  
(アルケアリサーチ)

石器の分類・データ作成 シン技術コンサル  
(アルケアリサーチ)

土器の接合・登録 伊比・長沢、曾根原、鹿島

土器の復元 勝田、長沢

土器・石器の実測トレス シン技術コンサル  
(アルケアリサーチ)

土製品・石製品の实測トレス 鹿島  
遺物の写真撮影 長沢、曾根原、鹿島  
写真のデータ処理 藤中  
遺構の観察・所見 柳澤、勝田、伊比  
土器の観察・所見 柳澤、伊比  
各種データ入力 藤中、鹿島

### ◆編集

○総括 勝田、柳澤  
図版作成 鹿島、伊比  
仮レイアウト 鹿島  
デザイン シン技術コンサル  
編集 シン技術コンサル  
イラスト 横沢 晃 (上田市在住)  
土器の絵 坂北小学校6年

稲葉愛美さん (p.17左)

久保村成美さん (p.3左)

聖南中学校1年

百瀬仁美さん (p.17右)

鎌田直之さん (p.17中)

嶋田亜美さん (p.3右・p.19)

増田利業さん (p.96)

松本秀平さん (p.3中・p.27)

聖南中学校3年

宮澤竜也さん (p.97)

### ◆執筆分担

第1章  
p.11 中村英夫  
(坂北村教育委員会社会教育指導員・  
長野県自然観察インストラクター)

第2章  
p.45 小林謙一・坂本稔・尾野大真・  
新免歳靖 (国立歴史民俗博物館)  
松崎浩之  
(東京大学原子力研究総合センター)

※【国立歴史民俗博物館平成16年度基盤研究「高精度年代測定法の活用による歴史資料の総合的研究」  
(代表 今村基雄)の成果による】

p.46-47 建石徹 (東京藝術大学大学院美術研究科)

p.50 伊比博和 (函学院大学4年)

p.52-53 山田しよう・池谷勝典  
(株式会社アルカ使用重研究センター)

第4章 柳澤、伊比

第5・6章 勝田、柳澤

土器の解説 (CD所収) 伊比

上記以外 柳澤

## ■協力者・協力機関一覧

調査と報告書の作成にあたりまして、次の方々ならびに機関にお世話になりました。巻末ではありますが、記して感謝申し上げます。

### ◆地権者のみなさん

久保田和博	久保田義廣	久保村てい子	久保村武夫	小林 重喜	小林 尚昭
小林 久廣	小林 好平	渡辺 卓造	柳澤 正治	横山 宗平	宮澤 辰夫

### ◆協力機関

長野県埋蔵文化財センター	長野県立歴史館	新潟県埋蔵文化財調査事団
京都大学霊長類研究所	大岡村教育委員会	麻績村教育委員会
生坂村教育委員会	本城村教育委員会	本城村東条伝承施設
坂北小学校	聖南中学校	糸魚川フォッサマグナミュージアム
明治大学黒曜石研究センター	鶴アルカ	鶴ショウデン
	(協)ボロンテ	

### ◆協力者

浅井とし子	浅野 盛雄	安藤 政雄	池谷 勝典	石上 周蔵	市之瀬繁雄	岩崎 厚志
大竹 憲昭	尾碓 大真	角張 淳一	加藤 周子	川崎 保	北島 康子	窪田 良一
窪寺 弘明	黒岩 美枝	小林 謙一	近藤 朋子	斉藤いづみ	坂本 稔	茂原 信生
新免 歳晴	建石 徹	鶴田 典昭	寺内 隆夫	寺崎 裕助	徳永 哲秀	豊田 義幸
永澤由美子	費田 明	原山 智	樋口 昇一	日向富美子	松崎 浩之	宮島 悦雄
宮島 宏	矢島 美雪	山崎 洋文	山科 哲	山田しょう	横沢 晃	和田 和哉
渡辺 誠	渡辺 芳晴					

### ◆調査参加者

#### ○発掘調査

荒木 博	大野多梨夫	小口 泰利	小口 賀茂	久保田一儀	久保田正臣	久保田康幸
久保田義廣	久保 秀雄	久保村てい子	桑野 夏実	小林 慎	小林つや子	小林 輝久
清水 準一	鈴木 時夫	須山華奈子	曾根原純子	高春 薫	滝澤 嘉昭	田口 教男
竹内 克詔	竹前 優子	田中 泰子	田村多恵子	中沢 勝美	中沢 久夫	長澤雄一郎
中村 裕子	中村 克弥	中山 健次	西澤 香江	西村 廣	林 由起	増田 周三
峰村 和幸	宮入 直利	宮下 京子	宮澤 直也	宮澤 優壽	宮澤 由香	宮嶋 正
村上 智見	柳沢 光子	山崎 皖				

#### ○発掘調査(考古学専攻生)

上條 信彦(名古屋大学大学院)	有野 謙市	平田 純一(以上 信州大学)	伊比 博和
菅野 紀子 梶 佳明 原 美明(以上 國學院大学)	二瓶 雅司	八鉦 大輔	
鈴木 正敬(以上 茨城大学)			

#### ○整理業務(平成15年度)

小林 つや子	曾根原純子	竹前 優子	長澤雄一郎	宮嶋 正	村上 智見
--------	-------	-------	-------	------	-------

#### ○整理業務(考古学専攻生)

菅野 紀子(國學院大学大学院)			
岩瀬 雄史	大島 孝博	高橋 岳(以上 國學院大学)	

#### ○平成16年度整理補助員

伊比 博和(國學院大学)	鹿島 すみ江	曾根原純子	長澤雄一郎	藤中 陽子	山科 香織
--------------	--------	-------	-------	-------	-------

# 報告書抄録

ふりがな	けんえいちゅうさんかんそうごうせいびじぎょうちくほくちくまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ							
書名	県営中山間総合整備事業筑北地区埋蔵文化財調査報告書							
副書名	坂北村 東畑遺跡							
編著者名	柳澤亮、勝田智紀、中村英夫、伊比博和、小林謙一、坂本稔、尾崎大真、新免康晴、松崎清之、建石徹、山田しよ、池谷勝典							
編集機関	坂北村教育委員会							
所在地	〒399-7601 長野県東筑摩郡坂北村2183-1 TEL0263-66-3657 FAX0263-66-1030							
発行年月日	平成17年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
東畑遺跡	長野県 東筑摩郡 坂北村 8031	市町村	遺跡番号	36度 26分 20秒	137度 59分 31秒	2003.05.15 ～ 2003.10.31	9,200㎡	農業基盤整備事業(東畑工区)に伴う発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
東畑遺跡	集落跡	縄文時代 (前期～後期)  平安時代		竪穴住居跡 120 掘立柱建物跡 1 土坑 740 埋設土器 2 集石など 2 自然流路 1	縄文時代前期～後期土器、石器、石製品、土偶、土製耳飾、動物骨片		縄文時代前期後葉から後期前葉まで続く集落跡の全面にわたる調査例。地域交流を裏付ける各地の土器や遺構が見つかる。なお、調査区の南半分を盛土保存している。	

県営中山間総合整備事業筑北地区  
埋蔵文化財発掘調査報告書

## 坂北村 東畑遺跡

発行 平成17年3月25日

発行者 長野県松本地方事務所

坂北村教育委員会

〒399-7601 長野県東筑摩郡坂北村2183-1

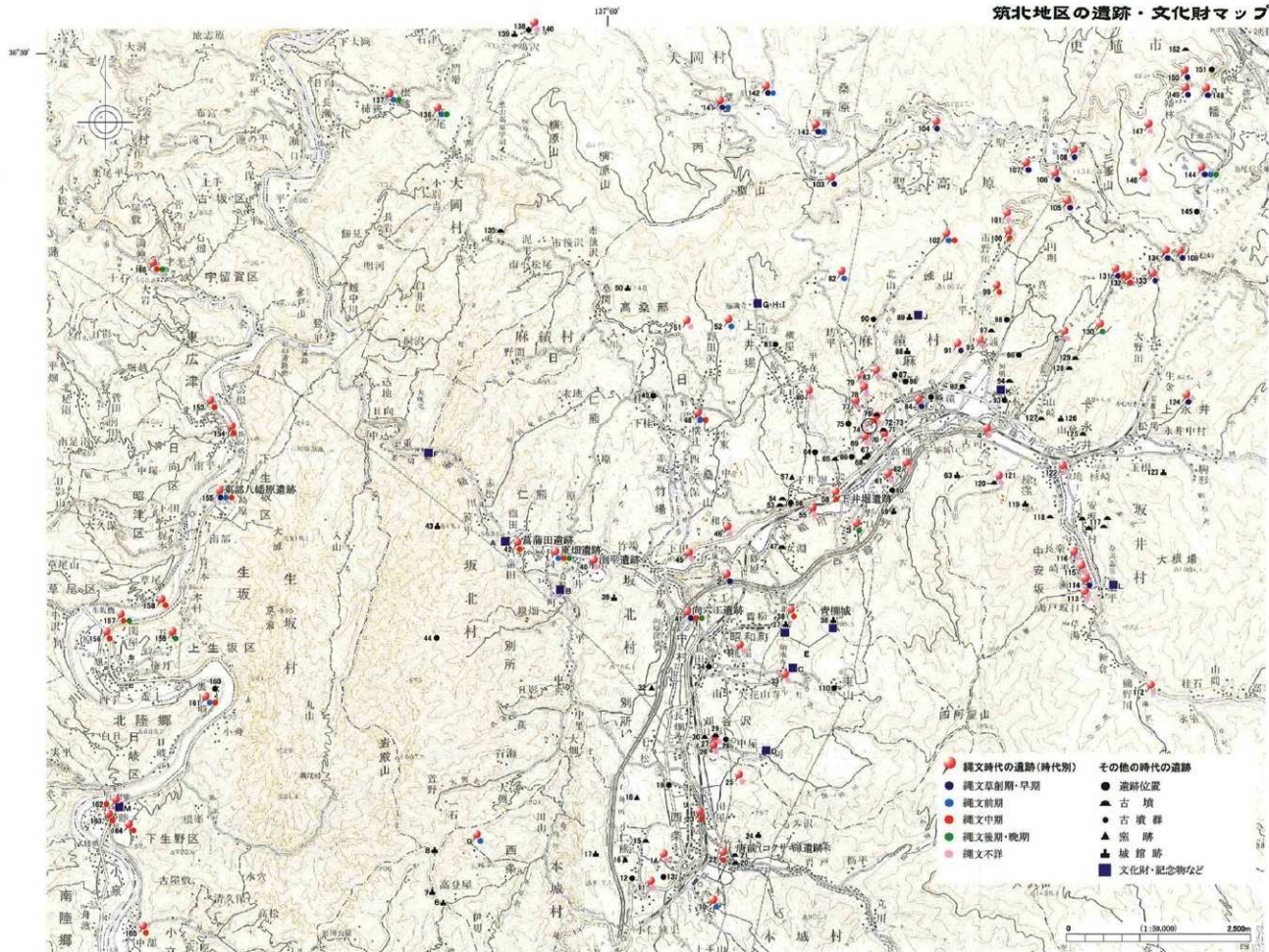
TEL 0263-66-3657 FAX 0263-66-1030

印刷 細谷印刷株式会社

〒372-0031 群馬県伊勢崎市今泉町2丁目939番地5

TEL 0270-25-0193 FAX 0270-25-0984

# 筑北地区の遺跡・文化財マップ



国土地理院地形図(1:50,000)「信濃池田」「坂城」を使用しました。

図中の番号、アルファベットは「遺跡地名表・文化財一覧」と対応しています。



坂北村東畑遺跡 全体図  
(縮尺 1:400)

